文樂座人形淨瑠璃

六月興行

四代目　竹本伊達太夫襲名披露

文樂座　四ツ橋

一部　金十五錢

午憚口上

お更衣の好季節と相成り四方皆々様には愈々御機嫌に在らせられ大賀此事に奉存候偖て當座六月興行の儀は人形淨瑠璃文樂座連中一座更生躍進の機會を得て各々申し合はせ大奮闘にて相勤め可申狂言の儀も斯道の大家により新作作曲せられたるお珍らしき新淨瑠璃を始めとして當座には秘藏の名曲と稱せられたる寶玉的狂言をも惜しげもなく配列したる名狂言を以て御意を得可く殊には此度新進竹本小春太夫儀、御贔屓御多數の御勸めを蒙り候まゝ四代目竹本伊達太夫を襲名仕り御披露申し上ぐる次第に有之此上ともよしなにお取立の程伏て御願申上度開場の曉は初日勿々より陸續御來場の程偏に御願奉申上候

昭和十一年六月

文樂座　敬白

昭和十一年六月一日初日

初日・二日目　午後二時開幕
三日目より　午後三時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席　御一名　金二圓五十錢
（お座席は五十錢上り）
二等席　御一名　金一圓二十錢
三等席　御一名　金六十錢

一等椅子席
一等お座席は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符專用電話　南(75)四七一一番
一般御用の電話　南(75)三〇三二番　三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越を願ひます

本誌へカットト廣告御掲載希望の向は文樂座宣傳部へ希ます

六月興行

初日・二日目午後二時開幕
三日目ヨリ午後三時開幕

三幅對曲輪鞠當　吉原仲の町の段（三時―三時二十五分）
國性爺合戰　櫻門の段　獅子ヶ城の段（三時三十五分―五時三十五分）
紙子仕立兩面鑑　大文字屋の段（五時五十分―七時〇七分）
名筆吃又平　土佐將監閑居の段（七時二十三分―八時二十七分）
四代目　竹本伊達太夫　口上（二十分）
新曲　連獅子（八時四十七分―九時十七分）
生寫朝顏日記　宿屋の段より大井川まで（九時二十七分―十時二十七分）
伊達娘戀緋鹿子　八百屋お七火見櫓の段（十時三十七分―十時四十七分）

出語りの始

文樂今昔譚より

竹田近江　出雲との提携

元祿が終つて世は寶永元年の秋と移つていつた。こゝに義太夫生涯の上に大きな謎が投ぜられたのである。凡そ偉人とか、大藝術家などには往々にして、普通人の知ることの出來ない心境があるものである。これもその一つには相違ない。

竹本筑後掾こと病氣により竹本座の座本を退く。さあ解らない、新派淨瑠璃義太夫節なる一流を興し、生涯をこれに打込んでゐる筈の義太夫、十八年間の苦節を忍んで、とても常人の及びもつかない堅忍持久を續け、ちつとやそつとの辛抱でなかつた辛抱をして、惡戰苦鬪をして來た義太夫、而かも近松門左衛門下阪によつて、やうやく『曾根崎心中』なる好狂言を得て藝術的にも經濟的にも立派に成功した、その一年を出ずして、些々たる病氣ぐらいで竹本座の座本を退くといふのだから、ことはいよ〳〵解らない、とても想像が出來ない、藝術家のみに許される、何か特異な心持が突如として義太夫に起つて來たのに違ひない。かうして義太夫は、ひとりさつさと舞臺生活から退いて行つてしまひ、くる〳〵と頭を剃髮して、道喜といふ法號に改め、拍手扇を持つた手に珠數をつまぐり、床本を經卷に代へて、朝夕を御寺詣でに過ごすといふ、たいへんな變りやうである。驚いたのは門弟達である、義太夫節は茲に又新しい境地を拓いて、ます〳〵世間に認められやうとしてゐる大事の瀬戸際、頭領に出て

しまわれては、杖に離れた盲目同然、これでは、なんにもかもまる潰れだ。門弟達は當然これを默つて見てゐるわけには行かない、さつそくに、一同はこぞつて義太夫の面前へ出て、涙をふるつて復座を嘆願した、門弟達が縷々述べるところの一言一句、もとより義太夫節の前途を思ふての上からであり、師弟の情まことに濃かに熱誠おのづから面にあふるゝばかりである。これを聞いてゐる義太夫とて、もとより人一倍血も涙もある人だ、門出が訴ふるところの至情の言葉には動かされぬわけには行かなかつた。さうして己が義太夫節の百年の後を考ふる時、どうも今度の行動は輕卒であつたやうに感じたのである。實を云ふと、義太夫の腹の底には、例の十八年間の忍苦の生活を追懷すると今が舞臺の引き潮時だと考へたのでもあつたが、更に又考へ直して見ると、それは一身の安樂、老後の安逸をのみ目がけた功利的な考へであつたと覺つた、義太夫節といふ大局から觀れば不忠實である、多くの門弟から眺めればいかにも無慈悲な譯であつた。

自分は藝道の爲に身命を捧げてゐる筈であつた、假りにも自分勝手の行ひは許されない、かう氣がついて門弟達の前に、生涯を斯道の爲に盡すことを誓つて、再び舞臺人として復活したのであつた。

これで義太夫節は危く中絶するところをまぬがれたわけである。

義太夫が心機一轉したその時。かねて、からくりや水からくりの發明で成功した竹田近江がその子の出雲に財産を頒けてやつて、人形淨瑠璃の經營をやつて見やうといふ考へを持つてゐた、そこで義太夫に說いた。義太夫は悅んで、一番重荷に思ふて居た竹本座經營上の一切物質的責任を彼に讓つて、ヤレ〳〵と安堵した以來座本はいよ〳〵竹本出雲となり、義太夫はこれで藝道一方に精進出來ることゝなつた。

淨瑠璃史上に記念すべき組織改革後の竹本座の第一回興行が、いよ〳〵開場されることゝなつた。時は寶永二年三月二日初日（異說十一月）近松門左衛門作『用明天皇職人鑑』を上演。此時あらためて竹本座から發表してゐる繪本淨瑠璃『用明天皇』の表紙見返しの繪にある、幹部連名を見ると、座本竹田出雲太夫竹本筑後掾、三味線竹澤權右衛門、おやま人形辰松八郎兵衛作者近松門左衛門として畫像と名とが記されてゐる。

近松が大阪に永住するやうになり、今までの囑託の作者から、判然と座附作者として招聘されたのは此時からであらうと思われる。名にし負ふ豪華をもつて鳴つてゐたからくり成金の竹田近江が後見となつて、名目上の新座主出雲を督して經營案を立て、人形の作り替へ、衣裳の新調、道具の改造、すべては一變して華美に成り、舞臺面の轉換には得意のからくり細工を應用し、嶄新な趣向を創め出したのである。從つて在來の竹本座の執つた藝術本位の方針は第二義となり、夥しく興行的色彩が濃厚になつて來たのだが、義太夫は何んな顔をしたらうか。おそらく微苦笑を洩らしてゐた事と思はれる。さて新座主は作者、太夫三味線、人形に當代第一流を網羅したその上に、嘗て豐竹座を創立した若太夫がその當時休演してゐたので臨時應援としてこれも一座に加へることになり思ひきり花やかな盞を開けたが爲に　これまた非常な大當り大好評であつた。近松はこの記念興行を祝福する爲に、狂言中に竹田家の意を体して記念文字を入れてゐる。第一段内裏の一節に、勅詔あつて、諸國の職人に官位を與へ、官名受領の認許あるくだりの文中

此時より諸職人、今も國名を許されて時に近江や世に出雲、そのよろづ代も竹の名の、筑後の後の末長き御代に住む身ぞ豊かなる。

義太夫はまた、この興行に始めて舞臺に顔を現はして演ずることを試みてゐる。さうして第三段目の『鐘入りの段』の景事を出語りして、見物を喜ばせた。たゞに見物を喜ばせたばかりでなく、これがそも〳〵太夫出語りの濫觴なのだから、すこし當時の實際を述べて置かう。戲曲や歌舞の類に謠曲道成寺を轉用した所謂『道成寺物』と稱するものは、可なり澤山にあるがこの鐘入りの段も、つまりはそれで頗る奇拔な趣向に劇化してゐる點、殊にその構造の群を拔いて大まかな點から見て謠曲以上かも知れない。謠曲では貴族的優美な白拍子であるシテ女を極めて民衆的な焚飯女に變へて登場させ『これは比國の傍らに、下司奉公の勤めをいたす飯焚きの女にて候』と語らせ、先づ見物の意表に出て耳目を驚かしてゐる。これは單に奇拔な趣向をしたといふばかりでなく、町人の都としての大阪の土地にふさはしく、作者が平民化した一つの見識でゞもある而かも此一段の文章は、作者獨特の景情備はつた

麗文で、絢爛自在の趣きがある。こゝを演者義太夫は苦心の節調で語りこなしたのだから、この一幕が當興行中隨一の呼び物になつたのは當然である。日本で始めて出來た遊君の元祖、播州室の津の室君が、假りに飯焚きの女中に姿をやつして、その夫が世を忍ぶ播州高砂尾上の濱へ訪づれてくる。そこには海中から現はれた天竺の祇園精舍の名鐘があつて鐘供養が行はれてゐる。女人の出入りは禁制といふことになつてゐるが室君はある誤解から嫉妬に燃へ立ち心も狂亂して、鐘供養の庭へ侵入する。そして鐘の中へ姿を隱す。この大騷動に、豐國禪師が弟子を引連れて出て大祈禱をすると、功驗忽ち現はれて鐘は自づと躍つて鐘は鐘樓へ引き上げられる。『アレ見よ蛇体は顯はれたり』でいよ〳〵一日中の大評判である『鐘入りの段』が始まるのである。當時の舞臺の有樣をいふと、正面に翠簾が吊るされてゐて、太夫三味線彈き等はその內部で勤め人形遣ひはその前面で技藝を演じたものである。舞臺の全部を今日の文樂座で見るやうに總て人形の領分に占有させ太夫三味線の席が側面に遷された形式は義太夫や近松歿後の變革である。この變革がやがて操淨瑠璃が歌舞伎に壓倒されて行つた變轉を物語るものだと云つてもよい。

さて此時、この晴れの記念興行を意義あらしめる爲め義太夫はいつも翠簾の內で語る例を破つて、それを高く揭げさせ、顏を見物に現はして語る例を始めた、この新しい形式を出語りと稱したのである。いよ〳〵鐘入りの段となると、正面の簾がさら〳〵と上る、そこにはシテ、竹本筑後掾が見臺を控へ、鱗形の模樣のある裃を着て（室君の蛇身に因んで）一刀を佩し、扇子を斜に構へて座つてゐる。ワキには竹本難波、三味線の竹澤權右衛門が九枚笹の紋模樣の裃に三味線を抱へてズラリと居並ぶ。かういふ舞臺の光景に始めて接した見物はドッとばかりに喝采した。

その前では、これもおやま人形の辰松八郎兵衛が全身を現はして、曾根島心中で試みた出遣ひの形式で、思ふ存分室君の蛇体を操つて滿場を醉はしめた。

なほ又義太夫はその冒頭の名文

涙川戀の氷に閉ぢられて、身を切り碎く思ひより、浮き川竹の憂き節を、せめて閨もる月だにも、あはれ枕に訪ひも來ず、我れ一人寢となりたるぞや。ひとり立

つたる一と、薄妬みの露の重たさよ。

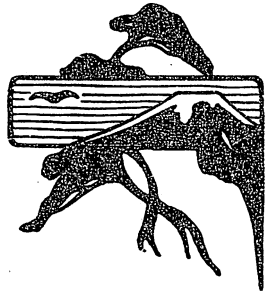
特に巧い節調で語り生かしたものと見へて、市中の一口淨瑠璃にも口ずさまれたといふことである。

なほもう一つこの淨瑠璃で、義太夫の見識といふものが現はれて感銘のふかい事は、本文のうち、廓の遊女の年中行事、紋日の事を叙べたくだり

人のよろこぶ日と云へば、我はなげきのます鏡

に節付けられた『愁ひの冷泉節（れいぜんぶし）』についてゞある。

本來冷泉節といふものは、古淨瑠璃『十二段』にある『さてもやさしい冷泉』の句につけられた華やかに艶麗な節廻しを云つたもので（冷泉とは三河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名である）あるが義太夫はわざとこれを愁ひの文章に使用したのである。かうした試みは。古淨瑠璃の人から見ると、破格の振舞、異端の業で、果せるかな批難の矢を浴せられたが義太夫は自己の信念の上に試みたことだからビクともしない、歡樂の極みと哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廓の女の愁ひ華やかなうちを悲しみを表はさねばならない、艶麗なうちにも何處か哀愁を帶びた『冷泉節』こそ恰好の節調であると信じたからである。これは勿論口で語るといふより心持で情を生かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義太夫（政太夫）もその門下に説いて『これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそ〳〵として嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし』と訓へてゐるほどである。



吉原仲の町の段

不破伴左衛門　竹本陸路太夫　竹本むら太夫　豊竹富太夫

名古屋山三　竹本淀路太夫　竹本千駒太夫　竹本播路太夫　豊竹

傾城葛城　竹本津の子太夫　竹本隅栄太夫　竹本太夫　豊竹

竹本駒若太夫　竹本子太夫　豊竹

竹本土佐子太夫　竹本土佐栄太夫

竹本若太夫　竹本相瀬太夫

豊澤猿二郎　鶴澤寛ヱ門　鶴澤友市

三幅對曲輪鞘當

吉原仲の町の段

不破と名古屋の鞘當の趣向が始めて見たのは元祿十年正月江戸中村座上演の「恵方男鶴梅宿參會名護屋」であらう、その第三番目が鞘當の趣向で團十郎の不破で當時大好評を博した此度食滿南北氏がこれを浮瑠璃化して豊澤廣助が作曲し　上演するその内容は廓の夜櫻は今を盛り。喜見城を眼のあたりの歡樂境へ何れ劣らぬ寛濶出立で通ひくる不破伴左衛門と名古屋山三が遊女の張合ひ。互ひに大道狭しと濶歩して腰に差した刀の鞘が當るあはや喧嘩にならうとする所へ今全盛の葛城太夫が留女に入り圓くおさめる。

（床本）　吉原仲の町の段

かゝりける世に住みながらはたゝがみその稲妻のはじまりを見たか戀路のぬれつばめ此處へ廓のいろの里、不柳のちまた全盛もゝのいふ花のひらきそめいつも月夜の五丁まちうつす化粧の富士の峰、江戸むらさきの筑波根と互ひに水木花と花、不破と名古屋の出立ばへ、上手より不破伴左衛門いつものこしらへ、下手より名古屋山三是亦いつものこしらへ編笠を着て出る。

双方眞中にて出逢ふ。

不この大道の眞中もよけて通さぬ六法に寛濶出立の稲妻組、名もやうはそれに引かへて、やさし今宵もし

野澤八造　豐澤團伊三郎
野澤喜代之助　豐澤新太郎
豐澤鶴太郎　豐澤仙三郎
鶴澤友三郎　豐澤廣二季
野澤吉　豐澤市松
野澤清友　鶴澤若猿
豐澤廣男　鶴澤一郎右衛門
鶴澤重次郎

つぼりとぬるゝをいとはぬぬれつばめまちわびつらんかの君と、松か櫻の風流は、名にをふ戀の上林、かうしたもやう着そはじめぬぐら貸さうかしづくの傘に、出逢ふや花の朧富士、不フム笠に面躰かくせども、あくるわびしき葛城へ通ふや雨の名古屋山三、名さ云ふは戀の闇雲にまた稲妻の不破の伴左衛門、不戀のかたきのぬれ鼎、イデその笠を、名色の仇なる雲に稲妻御身の笠も、不扨こそ山三、名伴左衛門、不お身の相方葛城は命と共に貰らふたぞ、名何を、葛まつた、二人ヤツ、葛またしやんせ　二人何と。

葛城傾城のこしらへ出る。

葛誰をか松の太夫職こんな出立も耻かしい外八文字はですがたまつたまたんせ世の中は色の世界ぢやないかいな。

眞中へ這入つてとめる。

不誰かと思へばそちや葛城、名白刃と白刃あむない〳〵、不怪我せぬうちに、二人のいた〳〵、葛何ののかうぞのきやせぬ〳〵、二人何を、葛アまたしやんせ、

葛サワリのいて殿御のつのめだちさうした野暮な長がたな花に嵐の風躰に戀の闇雲からかさにかしたねぐろの羽がひじめ放しはせきの稲妻や、いつそまかしてくるわなら情も龍田か葛城のその山々の霞さへ晴るゝ思ひぢやないかいなと身をすりよせてかつらぎが白刃恐れぬ其風情、

不伴左衛門は横手をうち

人形

不破伴左衛門　吉田玉幸
名古屋山三　吉田文作
傾城葛城　吉田光之助

詞いか様云へば其通り立つも立たぬも當座の花、名櫻と共に遺恨は落花不なれども拔いたこの白刃、名無事におさめる思案があるか。

葛お侍衆の掟が立たず其まゝ鞘にをさまらず血で血を洗ふ心なら

葛またしやんせや、

葛心の奥は白刃と白刃かうとりかへて鞘と鞘

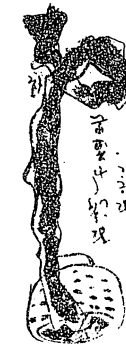
不ヤツ山三の白刃がこの鞘へ、名フム伴左衛門のこの白刃も、葛しつくりあふたは盃がわり、名白刃のあひしは正しく敵、不何んと、名陰陽そろふ雌龍雄龍、不フム、葛アモシ三人船にめせ〳〵わけある里へ涙のよな〳〵淺草川のあだし仇涙はまろとまゝよ引きはかへさじ二挺立ち古川昔にこりずも通よふ土手のあさ風身にしむ思ひ時雨吹雪の相傘に御身がわりにぬるゝは覺悟しんぞいとはぬ君ゆへに

（手踊やうの中に二人切りかけるを葛城よろしくとめる振ある）。

互ひにとけぬ意趣いこん、二人胸の炎かかげらふのそのいなづまかぬれつばめ、葛中をむすぶの名古屋帶、三人なか仲の町いつまでもこれや比翼のいなづまと風情を世々に

（ト三人ひつばり）

のこしけり。



國性爺合戰

樓門の段
獅子ケ崎の段

樓門の段

豊竹駒太夫
鶴澤清二郎

この床本が書卸されたのは正德五年十一月一日初日の竹本座で作者は近松門左衛門。その時の名題は「父は唐土母は日本國性爺合戰」でありまして、これより先にこの國性爺を材としたものに信濃掾の正本「國仙野手柄日記」があります。元祿十三四年頃錦文流の作とあります。この狂言は未曾有の大當りをとつて、三年越十七ケ月間打通して興行した名作であります、その後享保二年二月十五日初日で國性爺後日合戰が仍且近松翁の作で上場されました、この時人形遣の名手吉田文三郎が始めて出演し經錦舍の人形を片手にて出遣大好評を博しました。この時より大幕の上に小幕を引くことが始まりました。これが水引幕の始であります。樓門の段は三段目の口で竹本内匠理太夫が初演「獅子ケ城の段」は三段目の切で初演は竹本政太夫であります。全五段の内この獅子ケ城は最も有名で歌舞伎でも九代目團十郎の當り藝となつたものです。

人形

和藤内　吉田玉藏
老一官　桐竹門造
和藤内の母　吉田玉次郎
錦祥女　桐竹紋十郎
軍兵大ぜい

（床本）

樓門の段

仁有る君も用なき臣は養ふ事あたはず、慈ある父も益なき子は愛する事あたはず日本唐土樣々に、道の巷は別るれど迷はで急ぐ誠の道、石壁山の麓にて親子三人廻り合ひ、我が聟

とばかり聞き及ぶ伍將軍甘輝が館獅子ケ城にぞ着きにける聞きしにまさる要害は、まだ冴えがへる春の夜の霜にきらめく軒の瓦、鯱鋒天に鰭ふりて石壘高く築上げたり。堀の水藍に似て、繩を引くが如く末は黄河に流れ入る。樓門かたく閉せり。城内には夜廻りの鉦の聲がまびすく、矢間に石弓隙間なく、所々に石火矢をしかけ置き、すはといはゞ打放さん其の勢和國に、目なれぬ要害なり。一官案に相違し亂世といひ、かゝる嚴しき城門ことゞく、夜中にたゝき、聞きもなれぬ舅が、日本より來りしなんどいふとも實に思ひ取次ぐ者もあるまじ、たとへ娘が聞いたりとも、二歳で別れ、日本へ渡りし父といかなる證據をかたるとも、たやすく城中へ入れん事、難かるべし、いかゞせんとぞ嘶きけり。和藤内聞きもあへず、詞今更驚く事ならず、一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟のまへ、つひに見ぬ舅よ聟よと親みだてして、不覺を取らんより頼まれうか、頼まれぬか一口商ひ、いやといはゞ即座の敵、二歳で別れし娘なれば、我等とも行合姉きやい孝行の心あらば、日本の風もないかしく、文の便もあるべきに、頼まれぬ心底。我竹林の虎狩にしたがへし島夷を、軍兵のもとでにして切りなびける程ならば、五萬や十萬勢の付くは隙いらず、何の人頼み此門蹴破り、不孝の姉が首ねぢ切り、聟の甘輝の一勝負と躍り出づれば母も、二歳で別れ、日本へ渡りし父といかなる證據をかたるとも、たやれは知らねども、夫につれて世の中の、儘にならぬは女の習ひ、父とは親子御身とは、種一つ他人は自ら一人にて、海山千里を隔てゝも、繼母と云ふ名はのがれず、娘の心に親兄弟、戀したふまい物でもなし、其處へ切り込んで日本の、詞御身不肖の身を以つて、韃靼の大敵を攻め破り大明の御代にかへさんと、大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て、我身の無念を堪忍し、人をなづけ從へ、一人の雜兵も味方に招き入れるこそ軍法のもとゝ聞く、まして聟の甘輝は一城の主、一方の大將、是を味方に頼む事、大かたにてはなるべきか心を治め案内せよと制すれば、和藤内門外に大音上、伍將軍甘輝公、直談申し度き事有り、開門開門とたゝ

きしは、城中饗くばかりなり。當番の兵士聲々に、主君甘輝公は大王の召によつて、昨日より出仕有り、いつお歸りもはかられず、御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、いふ事有らばそれから申せ、御歸りの節披露してとらすべしとぞ呼ばゝりける。一官小聲になりいや人づてに申す事ならず、甘輝公の留守ならば、御内室の女性に直に會ふて申すべし、日本より渡りし者と申せば合點の有る筈と、いひも果てぬに城中さわぎ。我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者、殊に日本人とや、油斷するなと高提燈、銅羅饒鉢を打立て打立て、塀の上にはあまたの兵、鐵砲の筒先揃へ、石火矢はなして打みしやげ、火縄よ玉よとひしめきける。奥へかくと聞えけん妻の女房樓門にかけあがり、詞アー驚ぐな〳〵、開屈けて自らが、それよと聲をかくる迄、鐵砲放すな竈忽すな。ナウ〳〵門外の人々伍將軍甘輝が妻錦祥女とは我事、天下悉く韃靼大王に靡き、世に從ふ我夫も、大王の幕下に屬し此城をあづかり守り嚴しき折も折、夫の留守の女房に會はんとは心得ずさりながら、日本とあれば懷しゝ、身の上を語られよ、聞かまほしやといふ中にも、若しや我親か、何故尋ね給ふぞと、心もとなきあぶなさに、なつかしさも先立ちて、兵ども竈相すな、むざと鐵砲はなすと、心遣ひぞ道理なる。一官はじめて見る娘の顔上にはあまたの兵、鐵砲の筒先揃へ、石火矢はなして打みしやげ、火縄よ玉よとひしめきける。奥へかくと聞えけん妻の女房樓門にかけあがり、詞アー驚ぐな〳〵、開屈けて自らが、それよと聲をかくる迄、鐵砲放すな竈忽すな。ナウ〳〵門外の人々伍將軍甘輝が妻錦祥女とは我事、天下悉く韃靼大王に靡き、世に從ふ我夫も、大王の幕下に屬し此城をあづかり守り嚴しき折も折、夫の留守の女房に會はんとは心得ずさりながら、日本とあれば懷しゝ、身の上を語られよ、聞かまほしやといふ中にも、若しや我親か、何故尋ね給ふぞと、心もとなきあぶなさに、なつかしさも先立ちて、兵ども竈相すな、むざと鐵砲はなすと、心遣ひぞ道理なる。一官はじめて見る娘の顔の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座にむなしくなり、父は逆鱗蒙り日本へ身退く其時は三歳にて、親子名殘の愛別れ、辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん、我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を經て、今の名は老一官、詞日本でまうけし弟は此男是なるは今の母、密かに語り頼みた き事有りて、成果てし此姿、恥を包まず來りしぞ、門を開かせたべかしと、しみ〴〵くどく言葉の末、思ひ當りて錦祥女、扨は父かと飛下りて縋り付きたや顔見たや、心はちゞに亂るれど、さすが一城の主甘輝が妻下々の見る所涙をおさへて、一々覺えある事ながら、證據なくては胡亂なり、自らが父といふ證據あらば

聞かまほしと、詞いふより兵口々に、證據々々、證據を出せ出せ。ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし。そりや曲者よと鐵砲の筒先一度にばらりとつゝかくる。和藤内かけへだて。詞無用の鐵砲ぼんともいはせば、撫で切りにしてくれん。イヤ〳〵やつめ共に遁すなと、火ぶたを切つて取圍み、證據々々と責めかけて、すでに危ふく見えけるが。

詞一官兩手を上げて。アヽ是々證據はそつちに有る筈、一旦唐を立退く時、成人の後形見にせよと、我形を繪にうつし、乳母に預け置きつるが、老の姿は變はるとも、面影殘る繪に合せ、疑ひをはれ給へ。なら其言葉が早證據と、肌に放さぬ姿繪を高欄に押ひらき、柄付の鏡とり出し月にうつらふ父の顏、鏡の面にちら〳〵と寫し取つて引きくらべ、引合せてよく〳〵見れば、繪にとゞめしは古の、顏もつや有るみどりの黛鏡は今の老やつれ、頭の雪とかはれども、かはらで殘る面影の、目元口元其儘に我影にもさも似たり、父かたゆづりの額のほくろ、親子の印疑ひなし、扨は實の父上か、なうなつかしや戀しや、母は冥途の苦の下日本とやらんに父上有りとばかりにて、便りを聞かん知邊もなく、東の果と聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖をひらき、是は唐是は日本、父は爰にましますよと、繪圖では近いやうなれど三千餘里のあなたとや、此世の對面思ひ絶え、苦しや冥途で逢ふ事もと、死なぬ先から來世を待ち、歎きくらし泣きあかし、廿年の夜晝は、我身さへつらかりし。よう生きてゐて下さつて、父を拜む有難やと、聲も惜しまぬ嬉し泣。一官むせ返り、樓門に縋り付き見上ぐれば見下して心あまりて言葉なく、つきぬ涙ぞあはれなる。武勇にはやる和藤内、母諸共にふししずめば、心なき兵もこぼす涙に鐵砲の、火繩もしめるばかりたり。やゝ有つて一官。我々是へ來る事、詞ひ聖の甘輝を密かに賴み度き一大事、先々御身に語るべし、門を開かせて城内へ入れてたべ。なう仰せなくとも是へと申す筈なれども、此國いまだ軍なかば、韃靼王の捉にて、親類緣者たりとも、他國の者は城内へかたく禁制なりとの捉な

り。されども是は格別、こりや兵ども、いかゞせんと有りければ、了簡もなき唐人ども、いや〳〵思ひもよらぬ事、ならぬ〳〵。詞きこらい〳〵びんくわんたさつ、ぶおん〳〵と又鐵砲をさしむかへば、人々案に相違して、呆れ果てゝ見えるが、母すゝみ出で道理々々。詞大王より捉と有れば力なし、さりながら、年寄つた此母に何の用心入るべきぞ、あの姫に只一言物語りするばかり、わらは一人通してたべ、實浮世の情ぞと手を合せても聞き入れず。いや〳〵女とて宥免せよとの仰はなし、然らば我々了簡して、城内に有る中に、縄をかけてしばり置き、縄付にして通せば、韃靼王へ聞えても、主君の言譯我等が身ばれ、急いで縄かゝれよ、それが否やなら、詞きこらい〳〵びんくはんたさつ、ぶおん〳〵とねめ付ける。詞和藤内眼をくはつと怒らし。イヤ毛唐人、うぬらが耳はどこについて何と聞く。忝くも鄭芝龍一官が女房、身が母、姫が爲にも母同然、犬猫を飼ふ樣に縄つけて通さんとは、日本人はどんな事聞いて居ぬ、小むづかしい城内へ入らいでも大事ない、サアどざれと引立つる母ふり放し。それ〳〵今云ひしを忘れしか、大事を人に頼む身は、幾度か樣々の憂目も有り恥も有る、縄はおろか足枷手枷にかゝつても、願ひさへ叶はゞ、瓦に金を換ゆるが如し。小國なれども日本は、男も女も義を捨てず、縄かけ給へ一官殿と、恥しめられて力なく、用心の腰縄取出だし、高手小手に縛り上げ親子が顔を見合せて、笑顔をつくる日本の、人の育ぞ健氣なる。錦祥女も耐へかぬる、歎きの色を押包み。何事も時世にて、國の捉は是非もなし、母御は自らが預る上は氣遣ひ無し、何事か存ぜねども、御願ひの一通り、お物語り承り、夫甘輝に云ひ聞かせ、何とぞ叶へ參らせん、詞扨て此の城の廻りに掘つたる堀の水上は、自らが粧ひ殿の庭より落つる遣水の、末は黄河の川水と、流入る水筋なり、夫の甘輝が聞入れて、御願ひ成就せば、白粉溶いて流すべし川水白く流るゝは、目出度き印と思召し、いさんで城へ入給へ。又御願ひ叶はずば、紅を溶いて流すべし、川水赤く流るゝは、叶はぬ左右と思

獅子ケ城の段

竹本錣太夫
豊澤新左衛門
切
竹本大隅太夫
鶴澤重造

人形

錦祥女　桐竹紋十郎
和藤内の母　吉田玉次郎
吾將軍甘輝　吉田榮三
和藤内吉田玉藏
侍女大ぜい
軍兵大ぜい

召し、母御前を受取りに、門外迄出で給へ。善惡二ツは白妙と、から紅の川水に、心を付けて御覽ぜよ。さらば〳〵と夕月に、門の戸さつと押開き、伴ふ母は生死の境、菩提門を引かへて、是は浮世の無明門、貫の木てうどおろす音、錦祥女目もくれて、弱きは唐女の風。和藤内も一官も、泣かぬが日本武士の風。大手の門の立明けに、石火矢打つは鞨靺風。一つにひゞく石火矢の、音に聞くさへ、三重はるかなり。

（床本）甘輝獅子城の段

夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の緣、恩愛の綱結び合ふ、結ぶ餘りのしばり繩、かゝるためしは異國にも、まれに咲出す雪の梅、音色は同じ鶯の、聲にぞつうじ入らざりし。錦祥女は孝行深く。母を奥の一と間に移し、二重の褥三重の蒲團山海の珍菓銘酒を以つて、重んじ饗す有樣は、天下の榮花とも、又高手小手の縛めは、十惡五逆の科人とも見る目いぶせく痛はしく、さま〳〵に宮仕へ、誠に母といたはりし、心の中こそ殊勝なれ。腰元の侍女共寄集まり。詞なんと日本の女子見てか目も鼻も變らぬが、可笑しい髮の結ひ樣、變つた衣裳の縫ひやう、若い女子もあれであらう、裾も褄もほら〳〵ほら〳〵と、ばつと風が吹いたら、太股まで見えさうな、アヽ恥しい事ぢや有るまいか。いや〳〵とても女子に生れるなら、こちや日本の女に成りたい。何故と云や日本は大

きに和ぐ大和の國といふげな、なんと女の爲には、大きにやはらぐ好もしい國ぢやないかいの。ホウ有難い國ぢやのと、目を細めてぞうなづきける。錦祥女立出で、これ〳〵面白さうに何いふぞ。あなたは自とは生さぬ仲の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれども國の捻詮方なく、縛りからめるおいとしさ、韃靼王へもれ聞え、連合ひに告めあらうかと、宥免も成り難く難義といふは我身一つ、いづれも頼む食物も違ふとや、お口に合ふもの伺ふて、進ぜてくれよとのたまへば詞イヤ申し如才もなう、お料理も念入れ、龍眼肉のお食、お汁は家鴨の油揚、豚の濃醤、羊の濱燒、牛の沸鉾さま〳〵にして上げてもならいま〳〵しいそんな物いや〳〵、縛られて手も叶はぬ、つひ結飯をして呉れと、御意なさるゝ。そのむすぶといふ食物は、何の事やら何うも合點參らず、皆打寄つて詮議いたせば、日本では角力取を、むすびと申すげな夫れ故方々尋ねても、折しも惡うお齒に合ひさうな角力取が、切れものなりとぞ申しける。表に畫く馬車御歸館と呼ばはつて、唐櫃先きに舁ぎ入れさせ、悠々たるきぬがさも、指がに伍將軍甘輝と名に負ふその勿体。錦祥女出迎ひ。何とて早き御退出、御前は何と候ぞや。詞されば〳〵韃靼大王叡感深く、過分の御加増、十萬騎の旗頭、さんぎ將軍の官に任ぜられ、しよこう王の冠裝束たまはり、大役仰せ付けらるゝ、家の面目これに過ぎずと有りければ、それはお手柄目出度い〳〵、なう家の吉事は重なるもの、日頃戀しいゆかしいと申し暮せし父上、日本にてまうけ給ひし母兄弟、頼みたき事ありとて、門の外まで來り給へども、お留守といひ嚴しき國の捻を憚り、おのこゞは皆歸し、母上ばかりを留め置きしが、猶も上への聞えを恐れ繩をかけて、あれあの奥の亭にて、御馳走は申せども、胎内借らぬ母上繩かけし御心底悲しさよとぞ語りける。詞ム、繩かけしとはよい了簡、上へ聞えて言譯あり、隨分艱せ。いざ先づ我も對面せん。案内申せと言ふ聲の、洩れ聞えてや妻戸の内。なう錦祥女、甘輝殿のお歸りか、爰はあまり高上り、妾それへと立出づる

形はいとゞの老木の松の、しめからまれし藤かづら、立居苦しきその風情。甘輝見る目も痛しく。誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、その甲斐もなきいましめは、時代の捉是非もなし。詞それ女房お手が痛むか氣を付けよ、優曇華の賓客、聊か麁略を存ぜず、何事なりとも此甘輝が、身に相應の事ならば、必ず心おかるなと。世に陸じく癒せば、老母顔色打とけて。ヲ、頼もしい添い、其言葉聞くからは、何しに心置くべきぞ、頼み入れたき大事、密かに語り申したし、これへ〳〵と小聲になり。詞なら我々此度唐土へ渡りし事、娘ゆかしいばかりでなし、去年の初冬肥前の國、松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹、楠檀皇女小船に召され、吹き流され、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞くと等しく、父は元より明朝の廢臣、我子の和藤内と申す者、いやしき海士の手業ながら、唐日本の軍書を學び韃靼大王を亡ぼし、昔の御代にひるがへし、姫宮を帝位に付けんと、先づ日本に殘し置き、親子三人この唐土へは來れども、淺ましや草木まで、皆韃靼に從ひ靡き、大明の味方に志す者一人も候はず和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿の力を添へて下されかし、ひとへに頼み參らするこれが拜む心ぞと額を膝に押さげ〳〵、唯一筋の志思ひ込んでぞ見えにける。甘輝大きに驚き詞ムウ扨は聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、この錦屏女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ム、武勇の程唐土までも隠れなく、たのもしき思ひ立ち、尤もかうこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下、帝滅び給ひてより、頼むべき主君なく、韃靼の恩賞蒙り、月日を送る折から、望む所の御頼み、早速味方と申したいが少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず、とつくと思案し御返事を と言はせも果てず。フ、ウそりや御卑怯な、言葉が違ふ、これ程の一大事、口より出だせば世間ぞや、思案の間に洩れ聞えて不覺を取り、悔んでもかへらず、お恨みとは思ふまじ成れ成らざれ御返事を、サア只今とせめつくれば。詞ムウ急に返答聞きたくば、易い事〳〵、いかにも伍將軍甘輝、和藤内が味方なり。といふ

より早く錦祥女が胸元取つて引寄せ剣引抜いて咽笛にさし當てる。老母あわてゝ飛びかゝり、二人が中に割つて入り、持つたる手をふみ放し、娘を脊中に押やり〳〵仰ほのけに重り伏し、大聲上げて。これ情なや何事ぞ、人に物を頼まれて、女房を刺殺すが唐土の習ひか、心にそまぬ無心を聴くも、女房の縁ある故と、心腹が立つての事か、但しは狂氣か、たま〳〵始めて來て見たる、母親の目の前で、殺さうとする無法人、日頃が思ひやられた。味方をせずばせぬまでよ、今までと遣ふて親のある大事な娘。これ恐い事はない、母にしつかと取り付きやと、隔ての垣と身を捨てゝ、かこひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難き、怪我遊ばすなとばかりにて、共に涙にむせびけり。甘輝飛びしさつて。ヲ、御不審御道理。詞全く某無法に非ず、狂氣に候はず。昨日韃靼王より某を召し、此頃日本より和藤内といふえせ者、小僕下劣の身を以つて、智謀軍術たくましく韃靼王をかたむけ、大明の世にひるがへさんと、此土に渡る、彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、此甘輝を選り出され、さんぎ將軍の官に任じ、十萬騎の大將をたまはる。和藤内を我妻の兄弟と、今聞くまでは夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く楠とやらが肝膽を出で、朝比奈辨慶とやらんが勇力ありとも、我また孔明が脇に分け入り、噲樊項羽が骨髓をかつて、一戰に追ふて追ひまくり、和藤内が月代首、引提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合はせず、矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、伍將軍甘輝が日本の武勇に、聞きおぢする者でなし女にほだされ縁に引かれ、腰が拔けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雑口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱のがれ難し、恩愛不愍の妻を害し、女の縁に引かれざる義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲。詞ヤイ錦祥女、留むる母の言葉には慈悲心こもる。殺す夫の劍の先には忠孝こもる。親の慈愛と忠孝に、命を捨てよ女房と、理非を飾らぬ勇士の言葉。ヲ、聞き分けた、身に叶ふた忠孝親に貰ふたこの身体孝行の爲に捨つるは惜しいとも思は

ぬと、母をおしのけつゝと寄り、胸押開くれば引寄せて、見る目危ふき氷の刄。なう悲しやとかけ隔て押分けんにも、詮方なく、のけんとするに手は叶はず、娘の袖に喰付いて、引のくれば夫が寄る、夫の袖を咥へて引けば、娘は死なんとまた立寄るを、口に咥へてから猫の、塒をかゆる如くにて、母は眼もくれ身も疲れわつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女すがり付き一生に親知らず、つひに一度の孝行無く何で恩を送らうぞ、死なせてたべ母上と、口説き歎けばわつと泣きなう悲しい事いふ人や、ことに御身は婆婆と冥途に親三人、殘り二人の父母は、疎落した大恩ある、中に一人の此母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は創つても創られず、今こゝで死なせては、詞日本の繼母が三千里隔てたる、唐土の繼子を憎んで、見殺せしと、我身の恥ばかりは、普く口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは、我日本の恥ぞかし、唐を照らす日影も、日本を照らす日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常情け有る、慈悲專らの神國に、生を受けた此の母が娘殺すを見物し、そも生きて居られやうか、願はくば此繩が、日本の神々のしめ繩とあらはれ、我をいましめ殺し、屍は異國にさらすとも、魂は日本に導き給へと聲を上げ、道もあり、情もあり、哀れもこもる口説き泣。錦祥女はすがり付く、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、そゞろ涙にくれけるが、やゝあつて甘輝席をうつて詞ハツア是非もなし力なし、母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對、老母をこれに留め置き、人質と思はれんも本意ならず、與用意して所を尋ね送り歸し參らせよ。いや送るまでもなく、此遣水より黄河までよき便りには白粉流し、叶はぬ報せは紅を流す約束にて、迎ひにお出である筈、いで紅溶いで流さんと、つねの〆一と間に入りにける、母は思ひにかきくれて、思ふに違ふ世の中を、立歸つて夫や子に、何と語り聞かせんと、思ひやる方涙の色、紅より先の唐錦、錦祥女はそのひまに瑠璃の鉢に紅溶き入れ、是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる名殘は今ぞと夕

波の、泉水にさら〳〵、落滝つ瀬の紅葉ばと、浮世の秋をせき下し共に染めたるうたかたも、紅くゞる遣水の、落ちて黄河の流れの末。和藤内は龕燈に、簑うちかづき座をしめて、赤白二つの河水に心を付けて水の面。南無三寶紅が流るゝ。扨は望みは叶はぬ。味方もせぬ甘輝めに母は預け置かれずと、踏出す足の早瀬川、流れを止めて行く先の、堀を飛び越え塀を乗り越え、離、透垣踏み破り、甘輝が城の奥の庭、泉水にこそ着きにけれ。先づ母は安穏嬉しやと飛び上り、いましめの縄ひつちぎり、甘輝が前に立ちはだかり。詞伍將軍甘輝といふ髭唐人は和主よな天にも地にも只つた一人の母に縄かけたは、おのれをおのれと奉つて、味方に頼まん爲なるに、もつてうずれば法圖もない、味方にならぬは此大將が不足なか。第一女房の縁と言ひ、其方から廻ふ筈、ナア日本無双の和藤内が直に頼む返答せいと、柄に手をかけ突立つたり。詞ヲ、女房の縁といへば猶ならぬ、御邊が日本無双なれば、我は唐土稀代の甘輝。女にほだされ味方する勇士にあらず女房を去る所もなし、病死するまでべん〳〵とも待たれまい、追風次第早や歸れ、但し置土産に首が置いて行きたいか。イヤサ日本の土産にうぬが首をと、兩方拔かんとする所を錦祥女聲をかけ、ア、〳〵これなら〳〵病死を待つまでもなし、詞只今流せし紅の水上を見給へと、衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐剣乳の下より、旦先まで横に縫ふて刺し通し、朱に染みたるその有様。母は是はとばかりにて、かつぱと伏して正体なし。和藤内も動轉し。覺悟をきはめし夫さへ、そゞろに驚くばかりなり。錦祥女苦し氣に。詞母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいと成さるれど、我命を惜しみて親兄弟をみつがずば、唐土の國の恥と、かうなる上は女に心を引かさるゝ、人の誹りはよもあるまじ。なら甘輝どの親兄弟の味方して、力ともなつてたべ。父にもかくと告げてたべ。もう物言はせて下さるな、苦しいわいのとばかりにて、消え〳〵とこそなりにけれ。甘輝涙を押隱し。ヲ、出かした〳〵、自害を無にはさせまいと和藤内が前に頭を下げ。詞某先祖

は明朝の臣下、進んで味方申すべき身の、女の緣に迷ひしと俗難を憚りしに、我妻唯今死をもつて義をすゝむる上は、心清くお味方、大將軍と仰ぎ、諸侯王に準らへ、御名を改め延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召させ奉らんと、武運開くる唐櫪のふたへの綿羅綾の袂、緋の裝束、しやうほの冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金をみがき、絹笠さつとさしかくれば、十萬騎の軍兵ども、どうの旗ばんの旗、吹きぬき楯、鉾、弓、鐵砲、鎧の袖をつらねしは、會稽山に越王の再び出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ。ア、嬉しや本望や、あれを見や錦祥女、御身が命を捨てし故、親子の本望達したり、親子と思へど天下の本望、此劔は九寸五分なれども、四百餘州を治むる自害、此上に母がながらへては、初の言葉虛言となり、二度日本の國の恥を引起すと、娘の劍をおつ取つて、咽にがばと突立つる。人々これはと立驚げば。ア、寄るまい〳〵とはつたと睨み。詞なう甘輝、國性爺母、や娘の最期をも、必ず歎くな悲しむな。韃靼王は面々が、母が敵、妻が敵と、思へば討つに力あり、氣をたるませぬ母の慈悲、此遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば親には事を缺ぐまいぞ、母は死して諫をなし、父はながらへて教訓せば世に不足なき大將軍、浮世の思ひ出これまでと、肝のたばねを一とえぐり切りさばき。サア錦祥女、此世に心殘らぬか。何しに心殘らんといへども、殘る夫婦の名殘。親子手を取り引寄せて、國性爺が出立見上げ見下し嬉しげに、笑ガ顏を娑婆の形見にて一度に息は絕えにけり。鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む伍將軍。涙に眼はくらめども、母の遺言そむくまじ妻の心を破らじと、國性爺は甘輝を恥ぢ、甘輝はまた國性爺に恥ぢてしほるゝ顏かくす。亡骸をさむる道の邊に、出陣の門出と、生死二つを一と道の母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に金棒、打てば勝ち、攻むれば取り、末代不思議の智仁の勇士、玉ある淵は岸破れず、龍住む池は水涸れず、かゝる勇者の出生す、國々たり君々たる、日本の麒麟是なるわと異國に武德を照しけり。

紙子仕立兩面鑑

大文字屋の段

中　竹本文字太夫
　　豊澤廣助
切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衛

人形

母妙三　吉田玉七
番頭權八　吉田玉藏
大文字屋榮三郎　桐竹政龜
嫁お松　吉田文五郎
藤屋助右衛門　吉田小兵吉
手代傳九郎　吉田玉幸
手代忠兵衛　吉田玉德
下女　吉田文枝
丁稚　桐竹紋昇
仲仕　大ぜい

この浮瑠璃は明和五年十二月北堀江座に初演された菅專助の作で上中下三卷八段からなつてゐて、この大文字屋は中卷の切になつてゐます。此の段の内容をお知らせいたしますと

大文字屋の段

大阪上町での大店萬屋の悴助六は大文字屋からお松といふ貞節な嫁を迎へたにも拘はらず新町の遊女揚卷と深く契を交はします、其處へ附込んで、お松に戀慕してゐる番頭傳九郎の陰謀によつて新清水の浮無瀬で親助右衛門から紙衣一枚で勘當され丹波路へ馳落する。お松は實家の大文字屋へ歸つて居たが日夜夫の安否を氣遣つて居るが、お松の兄の榮三郎も律義者で妹に身を賣つて揚卷身請けの金子調達を勸めるので、お松も夫のため喜んで承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠に感じ揚卷の身代金を出して其年季證文を持て大文字屋を訪れるといふ親の慈悲、妻の貞節、義理人情に絡む絶品です。

大文字屋の段（中）（床本）

高臺の御制の詞ゆきゞなく竄賑ふ浪花津や寄り來る人も大阪は實日本の臺所、諸色諸問屋立つゞく中に取わけ本町筋、家柄古く身上は左前でもしが隱す河内も木綿の長暖簾、萬屋の助六が女房の里と格式も大文字屋榮

三郎、男一疋和らかな綿商賣の店先に汗水たらし仲仕共、咄しまじりにて〳〵と、つくる江戸荷のしめ括り、片手に印書墨の眞黑になる七つ前、仕廻仕事ぞせはしなき、帳箱には手代の權八、番頭顏の鼻高々、煙管ひねくりまがり聲、ア、コリヤ〳〵〳〵口やかましい世間咄し、置てもらふ、口が動けば手がやまる、仇口ばかり仰山でねつから仕事のはかゞ行かぬはい、僅七駄の荷造りに二人三人が一日仕事、それではとんと、勘定にかゝるものぢやないと、わめきちらせどいつもの事と、耳にもかけず仲仕共、ヤコレ申權八樣、またしてもせか〳〵〳〵となんぼ其樣にせかしやつてもな、手は二本ほかないによつて、二人前は働けませぬはいな、お前さんもまた日がな一日其樣に內で修羅くらにやせずと、ちつと神まゐりか、また何處ぞの淨瑠璃でも聞きにいかしやれませぬかい、エ、それを貴樣にならはふかい在の買まはしから諸國のかけ引おれが胸の算盤一つで一桁違ふても內は暗闇身上の狂言に追立てられて芝居所かい、よい仇口を叩かずに、仕事仕舞たらいんだ〳〵ハイ〳〵〳〵イヤモ番頭樣のきまりがよいので、お影でだん〳〵荷のでる口が少なふなつたはい、ハ、ヽ、ヽこれでは出入方も胸の算盤の桁が違ふ、二進が三進も行にくい早ふ仕舞てまん直しに五一かゝの顏なと見よと仕事片付け掃出して、挨拶そこ〳〵立歸る、エ、頤の過ぎたならずめらと、ぶつゝく後ろの暖簾を上げ立出る榮三が母、イヤノウ權八、さつきにから音がせぬが榮三はまだ戻らずかと言ふに權八、しかつめ顏ハイ朝めしの箸下に置くと馳け出した旦那殿、大かた九郎右衛門町か島の內へゝ見山屋でかなどざりませふぞい、イヤモ近年田舍の不景氣で掛損の仕つゞけ。モ氣もせやくは此番頭ばかり、其上諸式は皆高値極つた上にもきまらねば仲〳〵いけぬこちの身代じやにアノ旦那のゝらくらには此白鼠もヤモほつとこまつた、と主の影口憎て口我はがほするつらにくさ、むつとはすれど色にも出さず、ヲ、權八のずけ〳〵といかに心安いとて、主の影口はよふないもの、常に實体な榮三郎、何のそんな所へ行やらふぞ、噂を聞け

ば此間、清水でのやつさもつさ、犇せぬ、揚句のはてにはふんづまり、の助六殿は親御の勘當、との事ア、マ、有ふ事か有まい事か萬屋の若旦よく〳〵の事で有ふがそれに付ては那とも、言はれる身でかたりをした娘のお松、嘸や便りなからふと榮三の、イヤ贋金を遣ふたのと、やぼなもわしもとつ置つモ夜の目も合はぬ事の有條それからおこつての久離沙もの案じ、大かた犇殿の詫言せふと汰それでもまだ仕たらいでとふ〳〵萬屋の同行衆へ談合にかな、いたの揚卷を引揚て歩錢借りのまゝの稽古で有ふぞいの、ハテそれはいらぬ氣でコレマ高歩蹴と出かけたはいナハもせでござりますはい、モ大事の娘、ヽヽヤア〳〵そりやマアほんの事御の犇様ぢやが申しおかみ様の前でかいの〳〵イヤモほんの事かいの はちと言憎い事じやけれど、此まあ〳〵所かいなハヽヽ何が全盛の太廣い大阪に最一人とない大たわけ、夫の事なり、新町の親方から關破りアヽいとしぼなげにアノ美しいお松と願ふ故、代官所からも嚴しいお手様を七里けんばいけり飛し揚卷といふアノマア古狐にだんまされけふも當どふで追付青細引ヲヽこは〳〵〳〵ヲヽ恐ろしやのホヽヽヽモ吡しあげ、あすもあげと毎日々々揚詰にするさへぞつとすると尾鰭を添しわ豆腐のあげてもアノ様に買ふてはイんざん口、聞く妙三は氣遣ひさ老の ヤモとんとたまるものじやござりま習ひの目にもろき涙のしづくゝる珠數の玉も數添ふばかりなり、何と肝が潰ませふがな、ヲヽ其筈々々ヤヽお道理でござります〳〵はい、私も聞いた時はモ腹が立て〳〵餘り腹が立過ぎて悲しいやら又おかしいやらおかし悲しい悲しおかしいおかし涙がはら〳〵〳〵ハヽヽヲヽ私とした事が餘り吡しに身が入てお前様までを泣しましたはいなアシタガシよふお聞きなされませやそんな大それた科人の助六殿故、親御の勘當はコリヤ尤じやと思はれます、それに付てお松様をアノ萬屋の内に べん〳〵と置たらどんな難儀がかゝらふやら知れませぬぞへ高が嫁ふて置きざり同然にしられたお松様ハテモ男日照は有まいし、ちつとも早ふ呼戻して又ほかに相應なよい談合も有り

そふなもの、マ、よふ御思案なされませとお爲ごかしのそしり口、聟のわらから焚付る、硫黄の鼻の先智恵は修羅を燃さす工みかや、さとき妙三權八が詞のはし〳〵何とやら合點行ずと手を打ふりヲ、權八の何いやるぞいの、譬聟殿はどふ有ふと一旦嫁らしたれば萬屋の娘あちから戻されたら是非もなし、難儀がいやさに取戻す様な、さもしい心はないはいのハテモ聟殿がござらずば舅は親、助六殿のかはりに傍に居て孝行にするが嫁の道假令他人が聞かにやこそ人中でそんな事言出して大文字屋の恥ふれまふて下さるかと、恥しめられて佛頂頰テモ扨も堅いは〳〵エ、マ年寄の片意地と鐵橋のいがんだのは、どふでも燒かにやマ直らぬかいな、爲になる事いふがいやならどふなと御勝手になされませハレヤレ〳〵〳〵しゆんだ咄しで氣がつまつたドリヤ臺所へいて暖爛で一ばい引かけよふと禮儀をしらぬのはふず者、つぶやき勝手へ入りにけり、後には一人母妙三聟と娘の身の上を案じ重なる憂思ひ西の辻から闇しげに此家の主榮三郎心の屈托顏色に出さぬは百倍氣苦勞の胸を押へて立歸る母は見るよりヲ、榮三戻りやつたか朝早ふ出て今頃まで何處に何してひもじかろ、といふを押へてアイエ〳〵畫飯は得意先で呼れました、ヤそれはそふと母者人、どこへいても聟の噂、アヽひよんな事に成ましたはい、さいのふ今も今とて權八が聟殿のしなず咄し、聞けば聞く程氣のもめる事ばかり、マアどふしたらよからふと、そなたの戻りを待兼ました、ヲ、お道理でござります〳〵、シタガ申し母者人、爰をよふ御合點なされませ、助六は勘當なれば相手のない妹、助右衛門殿が戻したふても、サ何やかやの義理を思ひ遠慮の塲合も有りそふなもの、そこを汲み取らぬはこつちの不粹、何んと、妹を取戻ふじやござりますまいか、と律義な常の氣質とはそぐはぬ詞の先折て、アヽコレ榮三、そなた迄がそりや何事、マよふものを思ふても見や、たつた一人の子に別れ力ない舅御、殊に近頃はきつい弱り　せめて寢所の上げおろし介抱さすが一つ家のよしみ、アイヤ〳〵そりや悪い御了簡、大金持の萬屋、一人息子が身

お打つ女郎、請出してもやりたいけれど、義理有る中から貰ふか嫁かせになつてそうもならず、所で助六を追出したら嫁の方から逝るは定、そこで太夫を請出して、助六を呼戻す思案のそこと見た目は違はぬ、又助六は猶以てうるさがる妹、何も其様に親子とも、もみないものくふ様にして貰はいでも、大事ないじやござりませぬか、ハテモ十人並には勝れたお松、取返して何處へなと、イヤコレ〳〵榮三そなたはマアおかしい氣を廻す人じや、助右衛門殿に限りそんなむごい人じやない、フヽヽヽ、それはお前の正直一遍といふものモ此様にもちやり付出すと、常懇にした仲でも、むごい氣の出るが世間の有様、ナ申し、どふで有ふとお松はこつちへア、榮三聞きとむない、まだいやるはいの、助六殿は勘當でもお松と夫婦の縁は切れぬ、女房の方から隙取とは、そりや大法に背いた事、それまでもない、二人三人男を持たして可愛い娘を疵者には ヲ、此母が得すまいエヽマあほらしいといつにない母の腹立ぐはつたびし道具に當り中の間の襖押明け入にけり

（床本）**大文字屋の段**（切）

既に日もくれ飯焚が燈す勝手の八方に十方失ふ氣はくらやみ、心にもないわんざんを、いふも榮三が算盤の桁をはづれて門口の大戸おろせど落付かぬ胸の算用とつ置つ思案の中戸に人音して萬屋の手代忠兵衛、上り口に手をつかへお袋様榮三様へも助右衛門申します、ちと御相談の事に追付けそれへ、マア嫁をさきへ遣はします、委細はお目にかゝつて申上げませふといふ中門へ提灯のかげも心もかきくもるお松といへど色かはる、顔は辛苦におも痩せて、敷居も高き兄の内、供のでつちや腰元も、氣の毒そふにしよげ〳〵と猫に迫はれた忠兵衛は榮三が返事お松にも挨拶そこ〳〵供の者、皆打連て歸りける、妹はしほ〳〵兄の傍ものも得言はず袷に顔、榮三は奥口見廻してア、此間は定めていかい氣あつかひ、それでか、きつう色も惡い、推量して下さんせ、世界に運の惡い者は私斗りのやうに思はれて手も力もどざんせぬヲヽそふ有ふ〳〵何かの様子聞た故今夜は是非共おれがむかひに行

く所、よふ戻つてたもつたのふ、何のよふ歸りましよ内にも寢ぬ殿御でも、大事にするが女房の役と、心一ばい氣を付ても、氣に入ぬは私が誤りついに〳〵小やさしう氣の落付た事もない夫婦中でも萬屋の内から葬禮しられいとかゝ樣のおしへを守り辛抱したかいもない、夫の勘當其上に關破りのお尋者と聞て今朝から湯水さへ、咽を通らぬ癪の痛み、舅御は最前もアゝよい時に勘當した、關破りをせふが首の座へ直らふが親へ難儀はかゝらぬ祝ひ事に酒一つと立派にはおつしやれど目には一ばい涙を持わたしが、かんしてつぐ酒をお請けなされた盃もふるふてこぼれる酒よりも膝をぬらすは舅と嫁の、涙は勘忍せぬものと、むせ返りたるくどき泣榮三も俱に目をこすり現在の兄が氣にさへ感じ入つたそなたの貞節、助右衛門殿の心根を推量した故モ今も今とて母者人に思ひもせぬ廻り根性所へかふ戻つて來たは、おれが存念の屆いた印、コレわがみの其直な心を見すへておれが一つの無心が有がなんと聞てくれる氣か、ヲヽマ改つた事おつしやります兄弟中に何の遠慮、モどんな事でも聞いてたもるか、アイ、そしたら新町へいて、勘をしてたも、エヽヲヽ悔りする筈じや〳〵、二張の弓はひかぬと女の道を立るそち、何と勘がしられふぞ、がそこを破つて勘をするが、やつぱり夫助六へ心中、つらい勘めするを心中とはへ、さればいの、勘當しられてうろたへ廻るはよ事がないと諦めても濟せど、揚巻を連て、退た助六關破りといへば科人どのやうな憂目にあはふやらサ其科を助ふと思へば、揚巻が身の代を親方へ立てさへすれば、御上体は願おろしてモ何のふしなう事は治る、といふて其身の代がはした金で出來る事じやなや、しりやる通り近年は不手廻しなこちの身上モ中々才覺及びもない事、いかぬからの思ひつき昨日揚巻が親方、扇屋に直談して義理合の内證萬端打明てモ近頃無理な事なれど、妹のお松をかはりに取て申しおろしてくだされと、だん〳〵と、歎いたればアヽ了簡のよい親方よし揚巻が戻つてもふ疵のついた太夫、ほかに身受けの客も變改、廓の勘めはもとよりさゝれず、しかへ

に出しても虫付きと思ふやうに金にはならぬ、器量よしと聞及んだ萬屋の嫁御、ハテ得心づくで勤める氣なら、ヤこりや一番して見物じや、聞き分けたと、約束はかためて置たがコレおかしい所をりきむ兄と思はふが、爰をよふ聞てたも、先の萬屋助右衛門殿はそなたやおれが實の伯父貴、其後繼に手代を引上げナア、アレ今の助右衛門殿、家の甥と念頃にぎちかはするこちの身代モ肩を入て今日まで世話して下さる親切さ其息子の助六が難儀を餘所に見て居たらア、血を分た從弟ならだまつても居まい表向は伯父の從弟のといふても血筋でない放れ際、どうよくな捨て置けとサ思ふやうな助右衛門殿ではなけれ共、世間の口より此榮三が胸がどふも濟にくい、サ爰の所を辨へて、廓へいてたも勤てたも、きのふけふまで萬屋の花嫁御と、人に人を運た身が日傘をさしかけ、人中の道中、そなたの面目ないよりもおれが外い聞えふがいなさ、人に指ざし笑はれるもコレ義理と金とに恥を捨る心を思ひやつてたもと、母の手まへを憚る涙、聲をも立ず男泣お松も涙の顔ふり上げ、アイ〳〵〳〵〳〵もふ〳〵〳〵、何にも申しませぬ、よふ勤めさしてくださんす、兄様嬉しい忝い、アヽ是を思へば清水で夫の勘當ゆり次第、退ふといふて揚巻殿證據にもらふたコレ此櫛、助六様も手を切る印と守り袋の七枚起請、今さら義理の言い過し、取返されぬと合點して大阪放れ添ふ様に連てかけ落さしやんしても、世間もせまくイみのならぬ時には突詰た日頃の律義一筋に、もしひよんな心でも、出よかと思やわしや、身もよもあられぬ、嬉しや勘當赦たらば心置ない女夫じやと樂しんだのも夢現とてもわたしは世の中の女の數にも入られぬ身が、夫の爲にする勤め、恥しいとも、無念な共、口惜いとも思はぬが舅御や、かゝ様や、お前の心を思ひやり、それが悲しい〳〵と、くどき歎くぞいぢらしき、不便と思へど氣を取り直し母者人の手前は一寸遁れ世間へ顔が出されぬ、そなたは京の懇の中へかけ落した分にせふ、サア〳〵早ふ新町へ連ていきたい、そんならわたしや書置を、アヽイヤもふそれには及ばぬ事、榮三出かした。

お松よふ新町へいてたもるのふ、母者人お前さつきにからの様子をヲ、暖簾の内に立聞して泣いてばつかり居たわいの、四百四病の病より貧ほど術ないものはない、貞女は兩夫にまみへずと、女大學傍に置て朝夕おしへた母親が、夜毎〳〵に越路の客や、筑紫の人に添寢する、勤をよふする出かしたと譽るは何の報ひぞとどふど身を投げむせかへればアヽコレイナカヽ様〳〵〳〵其やうにむつかつて持病おこして下さんすなへ、わたしや何にもかもよふ合點して居るさかい一つも悲しい事はないナ、ない〳〵、ない〳〵〳〵といふ後聲もしやくり泣ヲヽ、道理御尤、道理じや〳〵〳〵御尤じや〳〵〳〵〳〵ほんに浮世の義理あいほどサイノ、人を泣かすものはないわいのと三人顔を見合はして手に手を取り組み、泣く涙、落瀧津瀨に春雨の猫ふりかゝる如くなり、まだ暮過ぎと蠟燭のしまつに闇も苦にならぬ、きんか頭の助右衛門、くゞり戸ぐはら〳〵咳ばらひ、ずつと入り來る姿を見て、親子は泣顔押しぬぐひ、ヲヽお出なされませ、エヽまだお見舞も申しませぬが、ア、たんとお心づかひ、なんの〳〵一家中から讓りうけた萬屋の家督棒に振かける助六め、まくり出して仕廻ふたりやさつばりと夜が寢よいが、ア可愛いは此お松、惡性な男を引つかゝへ舅への心づかひ、大阪中の嫁といふ嫁に煎じても呑したい、器量といひ、まだ廿にもならぬ者を、べん〳〵と留て置は、大きな殺生、今夜切りに緣切つて戻します、定めて不足も有ろけれど、かゝり子を捨る様な不仕合せな助右衛門何事も了簡して下され、ヤヽナニ嫁アヽいやもう嫁ではないお松女郎、何でも用があるなら遠慮せずと手紙でもはなれて居てもおれが氣は、やつばりかはる事はないと、いふもほろりと涙聲、母親はすり寄つて、平生お世話に成てゐる榮三郎、不足とは勿体ないが、たつた一つ聞入ませぬは助右衛門様、助六殿は一人子の事、大金持のこな様、揚巻とやらを受け出して、ハテ妾めかけは有るならひ、手元へ取寄せて置たらば、廓通ひも忽ち止み、マ此やうにやかましう惡い憂名も立ぬ道理、アヽコヽコレかみ様〳〵〳〵エそれや大まか

なりな、了簡じやわいの、讓り請けた身代でも、盜み出してつかいおるはしよ事がなけれど、親の手から傾城受出す金出しては先助右衛門殿へ言譯がござらぬはいの、又あかの他人のおれを伯父〳〵と義理を立、けつこう捌くこなた衆へもみす〳〵妾を傍に置してコレ此顏が合はされませふか〳〵其上のらめを勸當した後で吟味すれば備後の殿樣から拜領した東倫の三幅對、箱ばかりで、中は明がら、折わるふ殿樣も近々にお登りお手馴の掛物久しぶりに見やうなど〻御意が出まいものでもない、もしそふなつたらやくたいこくたいがこりや息子めをそ〻のかした傳九郎めが所爲と思ひ、親受人へ吟味にやつたりや、傳九郎めは其夜から行方が知れぬと言ふ隙やつて仕廻た奉公人、親受人もねだられず、難儀の元は皆息子め彌〻勸當の錠前をおろさねばならぬ樣になつたも此お松が不仕合はせおりや諦めて涙も出ぬが、嘸、こなた衆のと後言いさし、顏を背けてたぐり咳榮三も涙呑込んで、ア、段々とお氣のもめる事ばかり、ア、いや〳〵何事も思ひ流して勞の出ぬ樣になされませ、申、オ妹は慥に受取ました、サア相手のない若い嫁を逝しもせず傍に置ばア、あの親父め合點がいかぬわいのと、近所となりに思はるゝもいやさに氣の毒ながら舅去り、ヤ書て來た去り狀と、渡せば手に取泣入嫁、おしひらいてふしん顏兄樣わたしは讀ぬがあじいな文章ドレ〳〵ヤアこりや揚卷が年季證文ア、マ、、麁相いふまい、そりや去り狀〳〵〳〵じや、トハ又どふしてヲ、どふしてはそつちの胸に覺が有ふ今朝からぶら〳〵こちの内を見入れて門先をあちこちとするは道具會で近付になつた新町の扇屋、ハテ合點が行かぬと、隣の見世の片かげへよび込で、追かけくはしく樣子を聞ば揚卷が代に妹を賣て助け六が關やぶりの科を助けてやりたいと、涙を流して、榮三殿が段々の賴み故嫁御の器量を見に來たと、モ一ぶし始終を委しい咄、從弟といふは名斗りで、根は他人の伜めを、マそれ程にまで思ふてくださる深切、何と嫁が賣されふ〳〵揚卷が身請するにこそ血筋は引かねど姪と名の付くお松が身請けモ千兩萬兩投げ出しても草葉

のかげの先助右衛門殿がよもや腹も立られまいと、買て取た其證文、モ眞實誓文こりや伴めが可愛じやないぞや、こなた衆親子三人の志が、モあんまり〳〵忝けさ、氣休めにと氣休めにとあられぬ去り狀まんざら惡工みはせぬ助六め、追付け身の明りも立ち、首尾よふ内へ戻つた時、又改めて嫁入の式金は、其去り狀マどれ程義理を知らぬ伴めでも此様子を聞たらば、心も折れて夫婦中、睦じうなり、そなもの、何とそふではあるまいかと、色も香もある、梅干親父辛ふ見へてもすいなりけり、親子三人手を合し忝涙一時にわつと泣聲耳に手を當てアレ又泣しやるはいの〳〵〳〵ア、もふ〳〵〳〵〳〵此間は涙にほつと飽果た、どりや逝ましよと門の口とつかは出るもゆつくりと、泣に逝ると哀れなり、母親は氣を付て是はしたり、くらからふソレ榮三提灯を、ハイちよつと送つて參りましよと、手早に燈す小提灯追付行ば母親も、娘も少々落付いた胸をさすつて奥の間へ襖押明け入りにげる、往來も暫しとだへしと四方に人音かすかなる、折を見合はす格子先妙法蓮華經申すも愚かや祖師日蓮大菩薩、龍の口にて太刀の下に直り賜ひ又或る時は佐渡が島に流され賜ひ、難行苦行なされしも、彼一物をせしめんための御誓願なり、なむ妙りんはなけれどさへ渡る法華の題號相圖と見へ内よりくゞりそつと明け傳九郎きたか、權八首尾はまぶじや〳〵世話なしに娘は戻つた、助六が來て居ると一ばいくはして爰へ出そ、われも身振りを助六で物さへいはねば知れぬが暗り、くはへて退て腹存分樂しんだ胴がらは約束の通り京へ賣其金は權八にアコリヤ大きな聲すなやい、そこのところにぬかりはないわい、がいやな事は金七が、此中の晩から行衛が知れぬ、ひよつと隘助か助六に捕らまくられたら大きなぼく、モウおれも大阪に体は置かれぬ、ヲ、そりやうつかりとして居られぬが、マア何であらふと娘はおこそ、油斷せぬやう駒寄のかけに隠れて待て居い、見付られなと手先で知らせ、内へそう〳〵隔の襖差覗いて聲ひそめお松様〳〵ちよつと〳〵と小手招き何心なく出てくるを傍につれて小聲になり、コレコレナ

きてじやぞへ〳〵ヤきてじやとは誰がいの、サア今表から權八〳〵と呼だは誰れと出て見たれば助六様じやわいな、ヤアそれは、ハテ聲が高いはいな〳〵〳〵アヽアおいとしぼや身すぼらしい紙子がけ、涙でつぎてははなれ〳〵畜生の様な揚巻めおれが乾皮になつたを見捨、まいて仕廻ふ後白波、モそれからは獨ぼうし、犬に追れて一夜さは稲荷の森で寢たはいのふ、ヲヽ悲しかろ〳〵マ悲しなふて何とせふぞいの其眞實な女房を嫌ふた罰でひだるいめ、アノ急になんなりと喰してくれ、がマアお松にちやつと逢たい、逢してたもとおろ〳〵聲、アお馴染なり、ゆうふくに育つたお方がマ亂のやうな形を見てあつい涙が〳〵といひつゝ顔に袖屏風唖の涙で取かくればお松は誠と、そりやマアどこにエ早ふ逢たい呼ましてアヽイヤ〳〵〳〵まだ家内が寢もせぬ中めしたきや、でつちめに見付られては爲にならぬ、コレ駒寄のかげにかじんでじや、ちよつとあふて連ておはいり、わしや其間に内の首尾灯もくらふして置きますと、言様八方する〳〵〳〵おろしてとうがい庭の隅、隱せば傍薄暗りお松が思ひ山鳥のおろの鏡の夫したふ、身はわな〳〵とくゞり戸を、漸々明て軒の下助六様〳〵どこにじやいなアア、おいとしや現在女房の親の内へ、よふ這入りもせず隱れかゞんで、ヲヽマ此形は何事じやいな、其憂苦勞を思ひやつて別れた時から泣つゞけ、ちつとは可愛と思ふてなら、マ私がする様にマアこちへと、手に手を取ればあらくれし手さきに惚り、ヤ誰じやヲヽ、おれじやはいのと抱付顔、ヤア傳九郎めアレエ〳〵と言ふ聲に驚き馳け出る母親を、出さじと權八綿の楯、お松を引立かけ行傳九郎、戻りかゝつた榮三郎、出合がしらに傳九郎、逢たかつたと道ふさがれ、なむ三寶とお松を捨てひらりとぬき打ちかいくゞり拔身たくつて山雀投しくじつたかと加勢の權八、帶に取り付く妙三が氣轉はおりたる八方の鎧にむすび親子して、からだをじつと引あぐれば、宙にぶら〳〵のふかなしや、こりや目がまふと七轉八倒、門には二人がもみあいねづあふ内を氣ずかい榮三郎、すき間に遁れにげ出す傳九郎、ヤア詮議の有やつ遁さじと後をしたふて追かくる。

土佐將監閑居の段

豐竹和泉太夫
鶴澤友造
竹本長尾太夫
鶴澤友平

切
竹本津太夫
鶴澤綱造
ツレ
鶴澤友ェ門

人形

土佐將監　桐竹門造
將監奥方　桐竹紋太郎
修理之助　吉田玉幸
加納雅樂之助　吉田玉藏
吃又平　吉田榮三
女房おとく　吉田文五郎
百姓　大ぜい

名筆吃又平

土佐將監閑居の段

この淨瑠璃は寶永五年の竹本座上演近松門左衛門作に胚胎し、時代物と世話物の中間を行きたる作柄で近松翁夥作中の雄篇であります、巨匠土佐將監の弟子修理之介は鮫蔭に現はれた虎を繪筆で搔消し光澄の苗字を許される、兄弟子の浮世又平は師の不興を蒙り其上愚鈍と貧に悶々の裡にあるが今この光澄の出世を見るにつけ一層世を儚み今生の思出にと手水鉢に自畫像を畫き一念の通じて師より光起の苗字を許され喜びに大頭を女房づれに舞諷ひ、師より大役を仰付かつて勇んで往くといふ好箇の名作であります。

（床本）土佐將監閑居の段

爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ繪師あり、生れ付て口吃り言舌あきらかならざる上家貧しくて身代は薄き紙子の火燵箱朝夕の煙さへ一度を二度に追分や大津のはづれに店がりして妻は繪の具夫は畫く筆の軸さへ細もとで登下りの旅人の童すかしの土產物參錢五せんの商ひに命も錢も繋しが日蔭の師匠を重んじて半道餘りを夫婦づれ夜な〳〵見まふぞ殊勝なる夫はなま中目禮ばかり、女房傍から通辭してハア、また是はおよりませぬか誠にめつきりと暖かに日も長ふ成まして世間は花見の遊山のとざは〳〵〳〵〳〵致しま

するこなたは山蔭御涙人のおつれ〳〵をいさめのため嫁菜のひたしに豆腐のにしめさゝへでも致しまして關寺か高觀音へお供して春めく人でも見せませうと女夫申して居りますれど心で思ふたばつかり道者時分で店はいそがし洗濯物はつかへる爲業には〻かいかず日がな一日立ずくみ何をするやらのらくらと急げば廻る勢田鰻只今ぜゝから貰ひまして練貫水の大津酒ゆめ〳〵しうございますれ共此春からお仕合が直つて鰻の穴から出る樣に御世にお出でなされませほんにつべこべとわたしが言ふ事ばつかりこちの人の吃りとわたしがしやべりと入あはせたらよい比な女夫が一組出來ませふアゝおはもじやと笑ひける奥方も御挨拶よう祝ふてたもつた今宵は奇妙な事あつて修理は苗字を許され土佐の光澄と名乘るぞよ、又平も蹠分筆に心をつきや我名を上れば則師匠の名も出る道理ノウお德そふぢやないかまあ〳〵よい所へ酒肴幸ひ〳〵盃もいたどいてあやかりやいのと有ければ又平時節と女房を先へ押出しせなかを突我身も手をつき頭をさげ訴訟有げに見えければ女房お德心得て誠に道すがら百姓衆の噂を聞き身は貧也不具なりおとゝ弟子に土佐を名のらせ兄弟子はうか〳〵といつ迄浮世又平で藤の花がたげたおやま繪や鯰おさへた瓢簞のぶら〳〵生ても甲斐なしと身をもんでの無念がり尤共哀れ共連添ふわたしが心の内申も涙がこぼれまする奥樣迄は申せしがお直の願ひは此時節今生の思ひ出死での後の石塔にも俗名土佐の又平と御一言のお赦しは師匠のお慈悲と斗りにて涙にむせび入ければ又平も手を合せ將監を三拜し壘にくひ付泣居たり將監も不愍さに俱に心は亂るれどわざと聲をあらゝげヤア又しても〳〵叶はぬ願ひコリヤよつく聞け此將監は近江の國高嶋の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の爭ひ其上高嶋家の重寶雲龍の硯を宗丹達て所望すイヤきやつに持せじ我にたべと互ひに意地を言ひつのりついに御前のお聞きに立つて某は勘當受て此涙人住居今でも小栗に從へば富貴の身と榮ふれ共一人の娘おみつに君倾城の勸させ子を賣つてくふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ土佐の苗字を惜むにあら

ずや修理之介は只今大功有そちには何の功が有る琴碁書畫ははれの藝貴人高位の御座近く參るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立歸れとあいそもなくしかられてお德ははつと力を落しコレ又平殿こなたを吃に產付けた親御を恨さつしやれと賴みなく〳〵又平も我咽ぶえをかきむしり口に手を入舌をつめつて泣けるは理り見えて不憖なる折節表に人音して將監殿やおはする光信殿と呼はり〳〵拔刀簀戸押開きずつと入る將監目早くお身は狩野の弟子歌之助ならずや姫君を御供せしか何と〳〵されば舘の騷動いふに及ばず存知のごとく姫君の御供仕り漸〳〵切ぬけ爰かしこに忍びしが主人四郎次郎行方しれず是第一の氣づかひと心迷ふ其内に敵手ひどく迫かくるしや任せて置けと眞向に太刀さしかざし向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく四方八方に切ちらせしが敵は大勢こなたは一人なんなく姫君奪ひ取られ下の醍醐は雲谷が舘なり伴左衛門を始めとしても門をかためて寄付ず刀のはがねつゞかん迄とかけ入らんとせしがイヤ〳〵〳〵主人の身の上心元なし後をしたふて尋る所存姫君の御事は將監殿宜しく賴み存ずると詞も足も血氣の若者後をしたふて走り行く將監心ならずサア〳〵我爲の一大事いかゞはせんと思案顏奥方も氣づかはしくイヤ〳〵せいては事の仕損じあらん殊に其伴左衛門姫君に心をかけむたいにくどくと聞く上はお命には氣づかいなしどうぞ辯舌のよき人に將軍家の御意とばかり取かへす分別はござらぬかといふに將監げに誠せく事はない何れもいふておみやれと額に小皺頬杖つき各々小首かたむくる又平何ぞ言たげに妻の袖引せなかつき指さしすれ共合點行かずしんきをわかし女房を引退てつつと出師匠の前に諸手をつき唾を呑込でコヽヽ此討手にはセヽ拙者が參り姫君をウヽうばひトヽ取つて歸りましよ將監きつと見ヤア面倒な吃め思案半に邪魔入るそこ立てうせぬかと呵られてもおぢるにこそ膝ダヽ談合と申す口こそ不自由なれ心も腕も天下にコヽこはい者がない拙者が分別致し叶はぬ時はえんせう助定あつちへやるかコヽこつちへ取るか首がけ

のバヽばくち命の相場が一分五リン浮世又平と名乗つては親もない身がら一身命ははきだめの芥名は須彌山と釣かへ悴の時から舊功なし命にかへて申し上るも師匠の苗字を繼たいばつかり拙者めを遣はされて下さりませ申し〳〵さり迚は御承引ないか吃でなくば斯は有るまいエヽ〳〵〳〵うらめしい咽ぶゑをかき破つてのけたい女房共さりとはつれないお師匠ぢやと聲を上て泣き居たる將監猶も聞入なく不具の癖の述懐涙不吉千萬相手に成て果しなしこれ〳〵修理之介御溲向つて思案を廻らし奪返し來られよ早く〳〵畏つたと刀提立出る又平むづと抱きとめマヽマンマン待つてくれ師匠こそつれなく共弟子兄弟の情けじやコヽ此又平をやつてくれ後とも言はぬスヽスヽすぐ樣コリヤ又平某やだけに思ふても師の命は力なし爰を放せイヽイヽヤハヽハ放しはせぬ放さねばぬいて突ぞッ突コヽ殺せハツハヽヽヽ放しやせぬぞ修理之介も持あつかひ放せ〳〵と捻合たり將監夫婦も氣をあせり放せ〳〵とゞむれ共耳にも更に聞入れず女房お德縋り付あれお師匠樣の御意が有るおとましの氣ちがひやともぎ放せば女房を取て投げ踏付つ〳〵じだんだ踏みナヽヽヽ何じや儕迄がキヽキ氣ちがひとはエヽ女房さへあなどるか不具は何の因果ぞやとどうと座を組み壘を打て聲も惜まず歎きける心ぞ思ひやられたる將監重ねて汝よく合點せよ繪の道の功によつて土佐の苗字を繼いでこそ手柄共いふべけれ武道の功に繪師の苗字讓るべき仔細なしならぬ〳〵と言切れば女房はつと居直つてサア又平殿覺悟さつしやれ今生の望は切れたぞや此庭の手水鉢を石塔と定こなたの繪像を畫きとゞめて此場で自害し其後の贈號を待つ斗りと硯引よせ墨すれば又平默き筆を染め石面に指向ひ是生涯の名殘りの繪姿は苦に朽る共其名は石魂に止まれと我姿を我筆の念力やてしけん厚さ尺餘の御影石裏へ通つて筆の勢い墨もきへず兩方より一度に畫いたる如く也將監大きに驚き入り異國の王義之趙子昂が石に入り木に入るも和畫において例なし師に勝つたる畫工ぞや浮世又平を引かへ土佐の又平光起と名乗るべし此勢ひに乘て姫君を奪ひかへせと

有ければはつと斗り夫婦が悦び又平は忝しと口吃禮より外は涙にくれ踊り上り飛上り嬉し泣こそ道理なれ重ねて將監心剛にて心ざし厚けれ共敵に向つて問答せん事いかゞあらんと有ければ女房聞もあへず常々憂頭の舞を好きわれら諸共つれ脇にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さずサア又平殿悦びにめでたう舞て立まいかヲツト答て立上り古き舞を身の上になぞらへてこそ舞たりけれ去る程に鎌倉殿義經の討手を向べしと武勇の達者をゑらばれし夫は土佐坊是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜんと身にも應ぜぬ重荷をば大津の町や追分の繪にぬるゞふんは安けれど名は千金の繪師の家今墨色を上げにけりかくて女房いさみを付又もや御意のかはるべき早御立ちとすゝめけるヲゝいしくも申されたり身こそ墨繪のさんすい男紙表具の体なり共朽て朽せぬ金砂子極彩色におとらじと勇すゝみし、勢はゆゝし頼もし我ながら遒繪筆の健氣さよ唐繪の變噌張良を楯についたと思し召イザお暇と立出る將監庭に飛びおり待〳〵兩人吉左右の餞別せんと刀拔問も見せばこそ又平が像を畫し手水鉢二ツにどうと切破つたり一座の人々あきれ顏女房お德悔りしコレ申將監様大事の門出命づく身を祝ふての舞諷何がお氣に入ませぬ又平殿を二つになされしは不吉を願ふお心か但しは狂氣遊ばしたかオヽウ疑はしくば言ひ聞かさん昔都壽願寺の御佛は賢聞子芥子國といひし人親子名乘の其しるし片形作り合せし御佛なりしに然るに此佛体朝暮兩眼より御涙頻成しに時の名醫是を考へ五臓を作り込だる佛体なれば正しく肝の臓の損じならんと二ツに分けて是を直せば忽ち涙止りし事今の世迄も割符の彌陀と隱れなし此理を以て又平が魂込し此繪姿繪は吃らねど吃るは舌。舌は元來心の臓其心の臓調はざる故に

吃る今石面の又平を二ツに切破此將監繪師の手の内中々思ひよられ共コレ此刀は主人より給はる名作其名作の奇特を以て心の臓を斷切たれゝば吃る事はよも有らじと言ふに又平頭を下げハ、有がたし〳〵いよ〳〵首尾能姫君の御供申し立歸らんと詞すゞしき一言に奥方始め人々も二度悔りに又平は我でに我口疑はしく、らりるれろ、まみむめも、さしすせそ、かきくけこありや〳〵直つた〳〵いふは〳〵何を言ふ狸百疋樺百本天王寺のたう〳〵念佛十ヲ申せば佛に成る誓願寺の佛の誓師匠の御恩を頭に戴きどう〳〵〳〵力足踏又平は今ぞ出世の金頭。あつばれ諸人の繪本ぞと勇いさんで急ぎ行く。

六月興行の

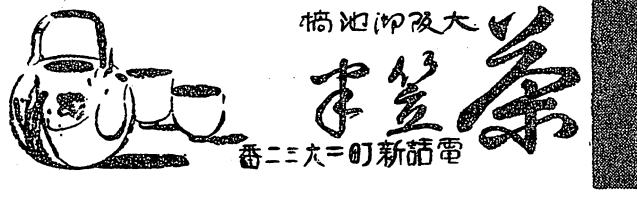
大歌舞伎

一日初日
毎日四時開幕

第一　塩原多助經濟鑑
第二　戀扇
第三　籠釣瓶花街醉醒

どうとんぼり

中座



新曲　連獅子

竹本相生太夫
豊竹呂太夫
竹本源路太夫
豊竹辰太夫
鶴澤道八
鶴澤叶
竹澤團六
鶴澤重造
鶴澤道造

人形

雄獅子　吉田榮三
雌獅子　吉田文五郎
子獅子　桐竹紋十郎

鶴澤道八作曲

新曲　連獅子

「勸進帳」最近では「大森彦七」を作曲した鶴澤道八が更生文樂の爲まったも長唄「連獅子」を淨曲化し六月興行の床を飾る內容は親獅子に蹴落されたる仔獅子が猛然と谷間より斷崖を攀登る豪華絢爛たる繪卷舞臺を上場新振附を特に楳茂都陸平が擔當する。

（床本）

連獅子

本調子〳〵夫牡丹は百花の王にして獅子は百獸の長とかや合〳〵桃李にまさる牡丹花の今を盛りに咲滿て虎豹に劣らぬ連獅子の戯れ遊ぶ石の橋〳〵抑是は尊くも文殊菩薩のおはします合其名も高き淸涼山合峩々たる巖に渡せるは人の工に有らずしておのれと此所に現はれし合神變不思議の石橋は〳〵雨後に映ずる虹に似て虛空を渡るが如くなり二上り〳〵峰を仰げば千丈の合雲より落る瀧の糸合谷を望めば千尋なる底は何所と白浪や合巖に眠るあら獅子の猛き心も牡丹花の露を慕ふて舞遊ぶ合小蝶に心和ぎて合花に顯れ合葉に隱れ追つおはれつ餘念なく合風に散行く花びらのひらりひら〳〵翼を追て共に狂ふぞ面白き本調子〳〵時しも簫笛琴笙篌の妙なる調べ影向も今行程によも過じ斯る險阻の巖頭より强臆ためす親獅子の惠も深き合谷間へ合蹴落す子獅子は合轉ろ〳〵〳〵落ると合見えしが合

身を飜し爪をけたてゝ合駈登るを合又突落し突おとされ合つめのたてども合嵐吹く木蔭にしばし休らひぬ合登り得ざるは臆せしかアラ宵てつるかひなやと望む谷間は雲霧に其れともわかぬ八十瀬川合水に寫れる面影を合見るより子獅子は勇立裂なけれと飛上り合數丈の岩を難なくも駈上りたる勢ひは目覺しくも又勇ましゝクルイ獅子團亂旋の舞樂のみきん〳〵牡丹の花ぶさ匂ひ滿々大きんりきんの獅子頭打や嘶せ や牡丹芳〳〵黃金の瑞現れて花に戯れ枝に臥し轉び寛にも上なき獅子王の勢ひ靡かぬ草木もなき時なれや萬歳千秋と舞納め萬歳千秋と舞納め合獅子の座にこそなをりけれ。

久々方振のり

東京大新派劇

一日初日
毎日四時開幕

大阪 歌舞伎座

營業種目

劇場・活動寫眞館・演舞場・各商店内外
各ステージ裝飾・シヨーウインド裝飾
園遊會々場裝飾
各徽章・慶弔花輪花束類・各神社用稻寶來

花六本店

店主 萩原吉三郎
營業所 大阪市南區千年町二九
電話南㊱二八七三番
工場 大阪市東成區片江腹見町

生寫朝顔日記

宿屋より大井川まで

宿屋より
大井川まで

竹本伊達太夫
小菜太夫改め
鶴澤友次郎
琴鶴澤友駒

人形

駒澤次郎左衛門　桐竹政龜
岩代多喜太　吉田玉市
戒屋徳右衛門　吉田小兵吉
下女おなべ　桐竹紋司
朝顔　桐竹紋十郎
笹久造　吉田文之助
奴關助　吉田榮三郎

此の曲は山田案山子の戯號で近松德叟が熊澤蕃山の作と傳へられてゐる。『露の干ぬ間』なる朝顔の小唄を原に想を構え『生寫朝顔日記』と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が『德叟遺稿朝顔日記』として讀本に刊行したが非常に評判になつたので天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らはしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、小瀬川、麻耶ヶ嶽、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五册十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ『生寫朝顔日記』であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遺子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は緣起が惡いと云ふので、『增補生寫朝顔話』と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。この曲の筋は、秋月弓之助と云ふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在住中、宇治の螢狩で宮城阿曾次郎と云ふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で

平綱ない別れを惜む。その際深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日の筐に阿曾次郎の船に投入れて纜を解いた其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門と改めて江戸へ出府する。一方歸國した深雪は男の事を忘れかね本國を出奔して都へ上ると、男は去つたので、その行衛を追ふ中盲目となる駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する。後で知つた深雪は直ぐと其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止となつたので、失望の結果入水して果てやうとした時、戎屋の亭主と下部の關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣と云ふ事が解り、駒澤が惠んだ眼藥は甲子生れの人間の生血で調剤すれば癒えると云ふので、甲子生れの亭主が切腹して。それが爲めに深雪の眼が開くと云ふ内容であります。

（床本）

宿屋より大井川まで

何國にも、暫しは旅と綴りけん昔の人の筆の跡、徒然佗ぶる假の宿夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火の影も淋しき奥の間へ、立歸る治郎左衛門。何心なく座を占めて、不圖目に付く衝立の、張交の歌讀下し。詞テ心得ぬ、此の貼紙の地紙の歌は先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪が扇に某が、又逢ふまでの筐にと、書いて與へし朝顔の歌。其後圖らず明石にて、船繋りせし其砌、琴に合はして深雪が節付け、折節思はぬ互の出船、飽かぬ別れを悲しみて、女の手づから、我船へ投込みし此扇。然るに今又此家にて、思はずも此張交ぜ、ア何者が諷ひ傳へて、はからず東の驛路に、見るも不思議と獨言其折からの忍ばれて、詠め入つたる時しも有れ、襖押開け德右衛門、小腰屈めて入り來れば、此方も扇押隱し。詞オヽ、亭主、先刻は扨々きつい働き、危き難を遁れしも、全く其方が志、サヽ是へ〳〵。ハヽ、冥加に餘る御言葉、エヽ最前此方へ參る砌何か三人密々話し、合點行かずと忍び聞けば、痳痺藥を茶に交て、彼方樣へ差上げんとの、アヽコリヤ、サアマ恐ろしい巧み、エヽ憎さも憎し、

直に申上げうとは存じたれど、夫ではどの樣な科人が出來うも知れぬと存じ、へ、幸ひ先日慰みに求めました笑ひ藥、ヤコレ幸ひと、痺れ藥と取替へたを、知らずに呑んだ先刻の時宜、此後とても旦那樣、御油斷は成ませぬぞへ。ホ、其儀は某も疾く承知致した、マ夫は格別、此衝立にある朝顏の唱歌は、何人の手跡、何いふことから御身が手に入りしぞエ、夫でござりますか、其歌についてマ哀れな話。エ、元は中國邊歷々の娘さうなが、何やら尋ねる人が有るとて、親元を家出し、夫より方々と流浪の上、果はとう〳〵目を泣潰し、跡の月までは濱松邊に、其歌を歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所緣の女子が尋ねて來て逢ひました、が其女も程無う病死、夫から又獨ぼし、此邊まで其歌を歌ふて歩きましたが、何が盲目でこそあれ、器量は良し、聲は良し見る程の者がいぢらしがり、朝顏々々と言ふて、其歌を知らぬ者はござりませぬ、私もあまりの不憐さに、此宿に足を止めさせ今では宿屋宿屋の御客の伽、何とまア不仕合せな者も有るものでござりますと、涙片手の物語も、心に犇々應ゆる廚澤、若し言交せし我妻かと蠢く胸を押鎭め。詞ム、夫は扨哀れな話。身も今皆は何とやら物淋しい鬱散の爲其女を、呼寄する事はなるまいか。イヤモ何が扨て易い事、只今呼びに遣はしましよ、御慰みに琴か三味。ム、何分宜きに賴み入ると云ふは仔細の有るぞとも、知らぬ佛氣德右衛門、尻輕にこそ立つて行く跡へ相役岩代多喜太、のさ〳〵と座に直り。詞ヤア駒澤氏、嘸御退屈でござらう。コレハ〳〵岩代氏、殊の外お早い事でござると、上べは解けても解けやらぬ、前垂掛けの下女お鍋、次の間に手を仕へ。詞申し〳〵只今朝顏殿が見えました、是へ通しましよかいな。ナニ朝顏とはそりや何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を彈き、旅の徒然を慰さむる瞽女とやら、抽者も何か物の淋しうござれば、ちと琴でも聞かふと存じ、亭主を賴み呼寄せましてござる。アイヤ夫や止めにされい。トハ又何故な。サレバサ、先刻身共が知音たる萩野祐仙同席如何と云はれた貴殿、乞食をば座敷へは通されまいかい。ハテ高の

知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ茶箱も持參致すまいと、しつぺい返しにぎつくりと、言句に詰れば減ず口。詞ア、左程御所望ならば兎も角も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと、彈かし召されて、早く此塲を追返されよと、飽まで意地持つ執拗者、寄らず障らず駒澤が。差圖にお鍋は心得て。詞朝顔殿召しまする、朝顔殿々々々〳〵と呼出つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身に積る、歎きの數の重りて、塒失ふ目無鳥、杖柱とも頼みてし淺香は脆く朝顔と、消殘りたる身一つを、遺に捨ても緣先の、飛石探る足元も、危なき木曾の丸木橋、涙り苦しき風情にて、漸々座して手を仕へ。詞召しましたは此お座敷でございますか、拙い調も御笑ひ種、おはもじ様やと會釋する、顔も深雪の成れの果、不愍の者やと急り來る、涙呑込みひかへ居る。岩代は夫とも知らず。詞ヤア見苦しい其形で、我々が目通りへうせたは、ム、聞及んだ朝顔めな、エ、きり〳〵立つて失せ居らう。アイヤ〳〵岩代氏、さうもぎどうに仰せられな、此方に呼寄せたればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思ひ掛け無う來た者を。叱るは武士の情に非ず、コリヤ〳〵女、大儀ながら其朝顔とやらの歌、サ、早う歌ふて聞かせいと、望む心は千萬無量、知らぬ岩代頻脹し。詞扨々駒澤氏には、イヤモ强い御熱心だはい。コリヤ〳〵盲女、何なりとも、エ、歌へ〳〵、サ、早く〳〵。ハイ〳〵ハイ歌ひまするでござりますと、焦るゝもじ様やと會釋する、顔も深雪の成れの果、不愍の者やと急り來る、涙呑込みひかへ居る。岩代は夫とも知らず。詞ヤア見苦しい其形で、我々が目通りへうせたは、ム、聞及んだ朝顔めな、エ、きり〳〵立つて失せ居らう。アイヤ〳〵岩代氏、さうもぎどうに仰せられな、此方に呼寄せたればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思ひ掛け無う來た者を。叱るは武士の情に非ず、コリヤ〳〵女、大儀ながら其朝顔とやらの歌、サ、早う歌ふて聞かせいと、望む心は千萬無量、知らぬ岩代頻脹し。詞扨々駒澤氏には、イヤモ强い御熱心だはい。コリヤ〳〵盲女、何なりとも、エ、歌へ〳〵、サ、早く〳〵。ハイ〳〵ハイ夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手に、戀故心盡し琴。誰かは憂きを斗爲吟の、絲より細き指先に、指爪さへも八ツ橋の、寢れ果てたる身を嘲ち、涙に疊る爪調べ。ウタ露の干ぬ間の朝顔を、合照す日かげの難面きに、合哀れ一むら雨の、はら〳〵と降れかし。詞ム、夫を慕ふ音律の、我々が身にも思ひ遣られて、思はず感涙致した、のう岩代殿。如何樣、琴と謂ひ器量と謂ひ、イヤモ中〳〵感心仕る、てイヤナニ朝顔とやらそこは定めて冷えるであらう、身どもが傍で今一曲、サア〳〵所望だ〳〵、アヽイヤ〳〵岩代殿、最う許して御遣りなされい、去とては駒澤氏、身共が望みを止めさつしやるは

ソリヤ意地の惡いと申すもの。イヤさうではござらねど、彼女も定めて疲れませうと存じて。ハヽアヤ然らば曲は止めにして、コリヤ〳〵女、汝もはらからの非人でもあるまい。身の上話も亦一興、話して聞かせヨ如何だい〳〵。ハイ〳〵能う問うて下さります、お言葉にあまへお話し申すも恥しながら、元私は中國生れ樣子あつて上方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に思ひそめたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘はれ浪花の浦を船出して、身を盡したる憂思ひ、泣いて明石の風待に、偶々逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國に歸れば父母の、詞思ひも寄らぬ夫定め、立る操を破らじと、屋敷を拔けて數々の、憂目を凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は東の旅と聞く悲しさ、又も都を迷ひ出で。何時かは巡り逢坂の、關路をあとに近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀し〳〵に目を泣き潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、何の世如何なる報にて、重々の歎きの數、憐れみ給へとばかりにて、聲を忍びて歎きける。詞テ扨哀れな話、併し男日旱も無い世界に、マ氣の狹い女だな、イヤもうしゆんだ話で氣が滅入つた、寢酒でも食べ氣を晴さう。イヤナニ女、暇を與る立歸れ。ハイ〳〵有難うござります左樣なれば御客樣、最う御暇申します。オヽ朝顏とやら大儀であつた、初めて聞いた身の上話、若し其夫が聞くならば、嘸滿足に思ふで有ろ。ノウ岩代殿。左樣々々。ハヽア是はマア御親切なお言葉、有難ら存じますと、杖探り取り立ちながら、虫が知らすか何とやら、耳に殘りし情の詞、名殘惜しさに泣く〳〵も、心はあとに探り行く。折節奥より若侍詞最早餘程深更に及び候、御兩所ともに早やお休み。如何樣、明日は正七ツの出立、イザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござれば、御構ひなく御先へ、左樣なれば御先へ臥せらう、ドリヤム、ヤ御免下されと、立上りしか、胸に一物、心をあとに奥の間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遲しと駒澤

手を鳴らして女を呼び。詞アヽコリヤ〳〵徳右衛門に急々對面したし、呼んでくりやれと云ひ付けやり、旅硯の墨摺流し、以前の扉開いて、何か書付け用意の金子、藥の包。取認める目の先へ疊を貫く白刃の切先、氣轉の駒澤有合ぬく刀にそゝけば下には血汐と心得てしてやつたりと疊刎上現れ出る笹久藏、駒澤覺悟と切付る、刄を恐れぬきせるのあしらひ廊下傳ひに來かゝる亭主コハ何事と窺ふ内苦もなく刀打落し後なり切るなりとたんの拍子首は遥に飛散つたり。ヤレ適れお手の内アヽコリヤムハヽヽヤ出來ましたイヤ申旦那樣一体此奴は何者でござります、ホヽウ某を欺討にせんと飛で火に入る夏の虫ハヽ死骸はよきに賴み入。ハヽお氣遣なされますな。シチ只今召しましたは何の御用で御座りますオヽ徳右衛門、折入つて賴み度きは先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼び寄せて給るまいか。ハイ畏まりましてどざりますが、彼女は直ぐに清水と申す方へ拾りました、御用事ならば呼びには遣はしませうが。マヽどうで今夜のお問には。ムヽハテ殘念至極身は正七ツの出立、マ能々緣のの。エヽ何んと御意なされます。アイヤナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲。此三品を其方に確りと預け置く間、朝顔が參らば渡して呉りやれ。ハイ〳〵、オヽコリヤマア、夥しいお金其上結構な女扇、お藥までも。オヽサ、其藥は大明國秘法の目藥、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、如何なる眼病も即座に平癒、朝顔に渡して呉りやれ。コレハ〳〵何から何まで、お心を籠められた下され物、參り次第相渡し、ハイエヘヽ、悦しますのでどざりましよと、受取る折しも時計の七ツ詞ムヽアリヤ最う七ツの刻限と、數ふる内に岩代多喜太、裝束改め旅出立、同勢引連れ立出でゝ。詞イザ駒澤氏、出立仕らうと、勸むる言葉に治郎左衛門、衣紋繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞ひ、心そぐはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出でゝ行く。跡見送つて徳右衛門。詞ハヽ同じ侍でも黑白の違ひ、意地くね惡い岩代に引替へ、情深い駒澤殿、アヽ天晴れの侍じやな、ヤ夫はさうと、朝顔に、今夜の禮にはそぐはぬ

下され物、ハア何ぞ様子の有りそな事と、思案の折から、深雪は何か氣に掛り、座敷しまふてうと〳〵と、又立返る切戸の内。徳右衛門目早に見て。詞オ、朝顔か、遅かつた。宵の御客様が最う一度呼びに遣つてくれいと仰しやつたれど、清水へ往つたと聞いた故、お斷り申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦びや、大枚のお金と扇、又結構な目薬、我身に遣つて呉れいと、コレお預けなされたわいの。是はマア〳〵冥加に餘る事、ハお禮申さいで殘り多いが、申し申し旦那様、此扇は何ぞ書いてはござりませぬか、はゞかりながらちつと見て下さりませ。オヽドレ〳〵、エヽ、金地に一輪朝顔ア露の干ぬ間が書いてあるゾヤ、裏に宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや。エヽ、アノ宮城阿曾次郎事、駒澤治郎左衛門と其扇にオイノ。エヽハヽアはつとばかりに俄の仰天。詞知らなんだ、知らなんだ、知らなんだわいな、道理で能う似た聲と思ふたが、そんなら矢つ張阿曾次郎様で有つたかいの、申し申し旦那様、其お客様は何時お立ちなされたへ、オヽ今の先の事じやが、我身は又お馴染か。馴染所か、年月尋ぬる夫でござんするわいな、斯う云ふ内も心が急く、追付いて只つた一言。と、行かんとするを引止め。詞アヽコレ〳〵コレマア〳〵待ちや〳〵、エヽ折悪う雨も降出し、此暗いに一人は危い〳〵。イエ〳〵イエ假令死んでも厭ひはせぬ。ササヽヽ、夫はさうでも盲の身で危い〳〵。イヤ〳〵放して〳〵と、突退け刎退け杖を力に降る雨も、合いつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて。三重迫ふて行く。名に高き、街道一の大井川篠を亂して降るあめに、打交り鳴るはたゝ神、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじき、夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪が倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。詞ノウ川越達、駒澤治郎左衛門様と云ふ御侍、最う川をお越しなされたか未か、聞かして〳〵と、云ふ聲さへも息切れの、聲に川越口々に。詞オヽ其侍は今の先渡つたが、俄の大水で川は止つた、笑止笑止とばかりにて、皆散々に行過ぐる。詞ナアナニ川が止つた。ハヽア、悲しやと張

詰めし、力も落ちて伏轉び、前後不覺に泣きけるが、又起き上がつて見えぬ目に、空を睨んで。詞天道様、エ、聞えませぬ〳〵〳〵わいな。此年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人に、逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とては無い者を、今日に限つて此大雨、川止とは〳〵、エ、何事ぞいの、思へば此身は先の世で、如何なる事の罪せしぞ、扨も扨も味氣無や焦れ〳〵た其人に、逢ふても知らぬ盲目の、此目に如何なる惡業ぞや。夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦潟、巾領振山の悲しみも、身に比べては數ならず、三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世に、有るべきかはと口説き立て、拳を握り身を震はし、流涕焦れ歎きしは、餘所の見る目も哀れなり。ヤ、有つて起直り。詞オ、さうじや〳〵、とても添はれぬ身の因業、此川水の増さりしは、所詮死ねとの事なるべし、未來で添ふを樂に、冥に三途の川と定め、弘誓の船に法の道、急がん物と泣く泣くも、合夫を戀し小石の數、袖や袂に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共既に飛ばんず其所へ。ヤレお待ちなされ深雪様と、聲にびつくりけしとむ内。駈け來る關助、德右衛門、斯くと見るより抱き留め。詞マア〳〵御待ちなされませ。イヤ〳〵誰かは知らねど、放して〳〵。マア〳〵待つしやれ朝顔殿、コレ關助殿とやらが見えたぞや。ハ、ア下郎めでござります、まづ〳〵氣をお靜めなされませと、無理に手を取り抱退くれば詞ム、さう云ふ聲は關助か。遲かつた〳〵〳〵わいの、此年月艱難して尋ね焦れた阿曾次郎様に、折角逢ふたに盲の悲しさ、夫とも知らず別れたれど、何らやらお聲が氣に掛り、戻つて聞けばやつぱり其人、おのれやれ追付かふと、跡追ふて來れば此川留、關助如何せうぞいのう〳〵〳〵。オ、お道理だ〳〵〳〵、御尤で御座居ます、何が拙者めも貴女様の御行衛を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女様は島田の宿、戎屋德右衛門方にござると、云はしやると思へば目が覺め、シヤ何でも不思議と、夜を日に繼いで參つた甲斐有つて、既ての事に危い所を、ヤレ〳〵嬉しや〳〵〳〵なハ、ヽ、イヤモ下郎めがお目に掛る

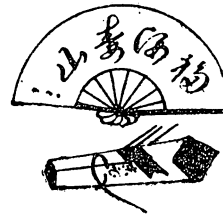
上は、お氣遣ひなされますな、駒澤様にお添はせ申す、併し淺香殿は、坂東順禮となつて、東海道へ尋ねて見える筈、がお逢ひなされましたかな。サレバイノ其淺香に跡の月、濱松で廻り逢ふたが、其夜惡者に出逢ひ、數ケ所の手疵、死ぬる今端に私を呼び、中山の邊には私が生みの親古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助が娘と名乘つて、逢へと云ふ敎へ、可哀や終に死にやつたわいの。ムヽスリヤ淺香殿には最後とや。ホイ、はつとばかり驚く内、始終聞き居る德右衛門。詞ムヽそんなら御前は、秋月弓之助様の御息女様、又淺香と云ふは我娘であつたか、ムンと心に點き件の短刀拔手も見せず、腹へぐつと突立れば、コハ何事と驚く兩人。お丶御不審は尤だが、先づ〳〵一通り聞てたべ、ハヽア私事は其お尋ねなさるゝ、古部三郎兵衛と申す者、即ち貴女様の祖父、秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り、奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き產落せしは女の子、貧苦の中に育つる中、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へ此短刀を添へて養子に遣りしが、廻り〳〵て思はずも、親が命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたかオ、出かしたな、又最前駒澤様の仰には、唐土傳來の目藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も、即座に平癒との事、則某甲子の生れなれば、我血汐を以て件の藥に調合し、早く彼方へ、サヽ早く〳〵、實にもと關助用意の水呑取出だし、手負の血汐受留め〳〵。泣入る深雪が懷の、妙藥取出し差寄すれば。深雪受取り、我夫の情に餘る賜物と、押戴き〳〵、只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、あり〳〵傍りの見え透くにぞ、深雪が嬉しさ關助も、悅び合ふぞ道理なる。詞ア、嬉しや、最早此世に望みなし、何れも去らば去らばと刀引廻し、笛の緒を刎切つて、名のみ流るゝ大井川、水の泡とぞなりにける。跡や骸に取り縋り、わつとばかりに泣く涙、露の干ぬ間の朝顔も、合開きし此目は盲龜の浮木優曇華の、花

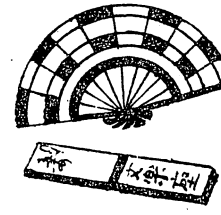
に勝りし夫の賜物、二つには我故此世に亡き人かと、取りつき歎く後より思いがけなく萩野祐仙、深雪やらぬと取付を、首筋摑んでかつぎ上、川へざんぶと水けむり。早や明渡る鷄の聲、山田の惠み彌勝り、茂れる朝顏物語、末の世までも著るし。

各種扇問屋

戸田商店

大阪市南區道頓堀
電話南⑮六九二番





あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

本店
大阪市西區土佐堀一丁目
電話土佐堀(44)
番三八〇三
番九三九四
番〇四九四
番一四九四
私書函大阪中央局第壹壹八番
振替口座大阪一三九〇九番

工場分
大阪市東區勞博町一丁目
電話船場(83)五三三番

出張所
大阪市東區本町二丁目（筋堺）
電話船場(83)四九四番

火見櫓の段

竹本源路太夫
豊竹駒尾太夫
竹本津咲太夫
竹本相榮太夫
野澤吉左
鶴澤友十郎
鶴澤友花
鶴澤友丸

伊達娘戀緋鹿子

八百屋お七火の見櫓の段

この淨瑠璃は「潤色江戸紫」を改作して安永二年四月北堀江座に上演されたのが初演で作者は菅專助、松田和吉、若竹笛朝でこの段は六段目の切になつてゐる、この内容を申上げますと吉祥院の小姓吉三郎は故主左門之助が殿から預かつた天國の剣を期日中に探し出せない咎によつて切腹せうとします。吉三郎も殉死をせねばならぬので豫て契りを結んでゐる八百屋お七の許に赴きそれとなく別れを告げよふとして行くと八百屋では お七の戀慕してゐる武兵衛から少からぬ借金をしてゐるのでお七に因果を含めて無理に武兵衛と夫婦になれと强要します。椽の下へ忍んでゐた吉三郎はこれを聞いてゐて書置を殘して出て行きます。後でお七は悔りしたが天國の剣は武兵衛が所持してゐるので策を以てこれを奪ひ吉三郎の命を救ふためにはお松が吉三郎の許へ届けやうとしますが夜中で町には木戸が閉つてゐますのでお七は罪を覺悟で火の見櫓に登つて半鐘を鳴らし火事と僞つて木戸を開かせるといふ筋である。

人形

八百屋お七　桐竹紋十郎
武兵衛　吉田玉德
下女お杉　吉田多三郎
丁稚彌作　吉田玉昇

（床本）

八百屋お七火の見櫓の段

跡にお七は心も空、廿三夜の月出ぬ中と、体は爰に魂は、奥と表に目配

り、餘所の歎きも白雪に、冴え行く遠寺の鐘かう〳〵、響き渡れば詞ヤア彼鐘は早九つ、夜中限りに江戸の門々を締めては、大切な用ある人も往來ならぬ嚴しいお觸れ、假令劍が手に入つても今夜中に屆ける事が叶はねば、吉三樣は矢張切腹。ハア悲しや是りや何とせう如何せうと立つたり居たり氣はそゞろ、更け行く空の怨しく、鐘鳴る方を睨み付け、拳を握り齒をかみしめ、只うつとりと立つたりしが、ふつと氣の付く表の火の見。ヲヽ然うじや、アノ火の見の半鐘を打てば、出火と心得、町々の門を開くは定、思ひのまゝに劍を屆け、夫の命助けいで置かうか、鐘を打つたる此身の科、町々小路を引渡され、燒殺されても男故、少しも厭はぬ大事無い、思ふ男に別れては所詮生きては居ぬ体、炭にもなれ灰ともなれと、女心の一筋に、帶引締めて裾引上げ、表に駈け出で、四辻に咎むる人も嵐に凍て雪は凍りて踏滑る、合梯子は卽ち劍の山、登る心は三惡道の通ひ道、杉は難無く奧の間より、劍を盗んで逃げ來る跡、ヤイ大盗人めと駈來る武兵衛、引抱へて拷き取る劍、遣らじと縋るを蹈飛ばす、どつこい然うはと取付く彌作。是や何ひろぐと太左衛門、引擦りつくるその手を直ぐに、腕搦みにこりや〳〵〳〵、彼處は見下す雪の屋根、其儘三途の瓦葺、睨む地獄の鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻りくる〳〵〳〵〳〵と、下には四人が挑む中お七は難無く火の見の上撞木追取ぢやん〴〵〴〵、音より間も無く爰彼處、一度に打出す撞鐘の、響きに連れて開く門々、嫌はれた意趣晴し、引縛つて訴人すると、お杉を蹴飛ばし上り來る、楷子を下より打返せば、武兵衛は大地へ眞逆樣、持つたる脇差取落すを、杉は追取り吉三が方、駈け行く跡を追掛ける、太左が首筋是はいなと、擔いで投げ込む用水樋、腰骨折つて蠢く武兵衛、お七も飛んで遠近の、人の噂と三重なりにけり。

お食事は
西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。

賣店は
二階東側及休憩所に御座います。お菓子番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗
殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は
一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は
正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は
お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は
各位にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は
各自にお持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします御視聽お心附は堅く御辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ
案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由に御飲み下さい。

幕間中は
寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

場内にて
病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

出演者
場合は事務室へお申込下さい。各種催物御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を致します。

當座御使用の
一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

御休憩の間は
ムシタオルはレートローション使用。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話 南(75)三〇三二番 三七八八番

昭和十一年五月廿九日印刷
昭和十一年六月一日發行
發行所 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹興行株式會社 大阪支店
發行人 松竹興行株式會社大阪支店内 鳥江鎮也
印刷人 大阪市西區土佐堀通一丁目十二 永井太三郎
印刷所 大阪市西區土佐堀通一丁目十二 永井日英堂印刷所

皆へ樂しへみなる

若く美しくなる

クラブ白粉

美と若さを創る新様式の白粉！

お肌を若返へらす、綜合ホルモンを配合した日本で唯一の白粉です

「化粧アレ」とか「白粉ヤケ」の心配なく却つて若返へる神秘的白粉です